恋姫と、北郷家当主

江田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫と、北郷家当主

【Ｎコード】
Ｎ２８１４Ｈ

【作者名】
江田

【あらすじ】
平行世界の日本皇国。皇族を護りし四家のひとつである北郷家の当主「一刀」は、自身の行動に悩みを抱えながら過ごしていた。白装束そして左慈との戦いの後、足を踏み入れた世界は過去の世界。一刀は当てもなく彷徨う。そして出会うのは…

序（前書き）

「恋姫の世界に」を書いている江田です。
感想の方で無理矢理進めている感じがすると、指摘を受けまして、
時系列をしっかりとした話をこちらで書こうと思います。
オリキャラが大幅カットされる予定です。

序

『序．予言と、白装束』

街が一時騒然となった。

左腕が斬られ、腹からも血を流した占い師らしき女が、往来で叫びのような声をあげたのだ。

『天より漆黒の衣を纏いて、光り輝く流星と共にこの地に舞い降りるは、至高の武人―

幾人の人々を救い、守り、この地に生きる者達と闘う存在へとなる者―

その武は、幾何万の人々のために―

その知は、未来を作る子供達に与えられる―

その心は、国を守る兵士たちに伝わっていくであろう』

言い終わった占い師は、そのまま前のめりに倒れた。女の言葉が終わるのを待っていたかのように白装束を着込んだ者たちが近寄ってきて……女の身体を剣で何度も突き刺した。

女は最初の一声だけおぞましいほどの悲鳴を上げたが、すぐに聞こ

えなくなった。聞こえるのは何度も肉を貫かれる音、血が吹き出る音、骨が砕かれる音だ。

白装束の人間たちが去った後には、血の池があるだけで占い師らしき女の姿は微塵も残されていなかった。

＊

『やっと…見つけたぞ……』

その日、いつも通り北門を護衛していた俺の目の前に銀色の装束を纏い、拳に篭手を填めた道士らしき男が早い足取りで近寄ってきて、鋭い蹴りを放った。

咄嗟のことで俺は防御の構えを取り、蹴り飛ばされた後受身を取り態勢を整える。

襲撃者の年齢は十代後半、武器は…篭手？　武術は徒手空拳か。

男の顔は驚愕の表情を曝け出している。まさかだと思うが、あの蹴りで俺を倒せると思ったのか？　四家がひとつ、『北郷』家の第１０２代目の当主であるこの俺を？　ふざけているとしか思えない。

俺は、北郷家の当主が継承してきた刀に手を掛ける。刀の名は「村雨」　津田越前守助広が鍛えた刀のひとつで、ずっと昔の北郷家の当主が天皇から与えられた一品。まぁ、一説によると伝説の宝剣じゃないかといわれている品でもある。なんせ、斬っても使っても錆びる事が無いのだから……

『無駄なことを…北郷…お前はここで死ね』

物騒なことを言ってくれる。だが、今の言葉で分かったことがある。こいつの狙いは天皇陛下と皇后さまではなく、この俺ということか。

繰り出される一撃目と同じ軌道の蹴り。俺は半歩下がって、刀を抜刀すると同時に振りぬいた。

男の膝から先を斬り落とす。切り落とされた膝から先の部分は宙を舞って、俺の後方に落ちる。男は、片足を失ったことに呆然とし、バランスを崩しその場に倒れこむ。そして、身体の一部が消失した部分を見て、くぐもった悲鳴を上げる。俺は、その男に近づき……

「何の目的があって、この皇宮に来た？　まさかだと思うが、俺に勝負を挑むためとか言わないよな？　この皇宮には、如何なる理由があっても皇族と四家の当主以外の侵入は認められていない。入った時点で死刑が確定だ。この日本皇国の国民であれば常識のはず……」

そう常識。

天皇主体のこの国で、天皇に近づけるのは一握りの人間だけ。あとは、殺そうとする者たちだけだ。

天皇を殺そうとしてきた者達は、歴史において何人もいた…が、我らが四家の護衛者がいたおかげでこの時世まで、表立った天皇襲撃は無い。国民は知っている。四家にはどんな手を使っても勝てないことを。

身体は鍛え、精神も鍛え、知識を蓄え、毒を克服し、家によっては空気を蹴るように鍛錬されたり、身体を鋼鉄のように変え攻撃に耐えうる秘技を身につけたり、挙句の果てには天災を身につけることもしている。

それぞれの家のしきたり、家訓、鍛錬を乗り越え、先代…俺の場合はお袋、親族と下々の武家の当主全員に認められて初めて四家の一角の当主になる。

そこら辺の道士程度に遅れなんか取らない。

一番厄介だったのは、忍者くらいじゃないか？　質量兵器を持ってきた奴らもいたけど、俺たちの速さの前に諦めた…奪い取った…しね。

『お前は、北郷　一刀だろう？　なぜ、こんなにも強いのだ？』

「俺は、北郷家の現当主だぞ。強いのは当たり前だろう？」

襲撃者からの質問は至極簡単な物。だが、普通は常識の部分。俺が逆に聞きてぇよ。

『くそっ……このままでは計画が…』

計画？　俺のところは囮か！

俺は、トランシーバーを片手に連絡を取る。

「こちら、北門。侵入者1撃破完了…他に仲間がいる模様。警戒さ

れたし……」

『了解。南門…異常なし』

『東門、ＡＬＬ　ＧＲＥＥＮや。問題ないで。』

『西門、以上ありません！…えっ？　圭吾…あっ…』

『一刀君、侵入者の特徴は？』

俺は、襲撃者の特徴は何かあるかなと男の方を見ると、斬ったはずの足が修復していて、今まさに攻撃の構えを取ろうとしていた。

「特徴…ＵＭＡ（ユーマ）。再生能力あり。道士の格好をしている」

トランシーバーを投げ捨て、刀を縦に構える。上段に２発、下段に３発の蹴りが放たれる。俺が反撃しようとすると、距離を置き反撃を許さない。その内、俺が完全に防御するのが分かったみたいで、襲撃者の雰囲気ががらりと変わった。

そして、男の掌低から放たれる気の塊。

俺は避けたが、その先にあった花壇がめちゃくちゃになる。

「お…お前！　なんていうことを！！」

『なんだ？』

「あの花壇はなぁ…天皇陛下の孫に当たる櫻様の花壇なんだぞ！それを…よくも！」

俺がこんなにも慌てているのは何も花壇がめちゃくちゃになったからではない。あの花壇を作ったのが櫻様と先代である母であること。花壇をぶち壊した→櫻様が泣く→先代に伝わる→俺、フルボッコ……の方程式が成り立ってしまう。やべぇ……櫻様のことを娘のように感じていた母だ。実子である俺くらいグシャッと行く可能性がある。襲撃者を早くなんとかして、修復せねば！

「悪いが急用が出来た。軽く本気を出すけど、恨むなよ」

『ほざけ』

「ん…。そうだな…『動くこと、雷挺の如く』」

地面の石畳を蹴り砕き、襲撃者の頭から股座に掛けて切り裂く攻撃は、ギリギリのところで避けられるが、右腕、右脚を奪い去る。右半身を失った男は、ゴロゴロと転がり悶絶する。

「再生するのに…痛いのか？」

俺は襲撃者に近づき、左胸に刀先を突き刺す。血が滲み出てきて、男はこれ以上の侵入は許さないと残った左手で刀を握る。俺は、左腕の骨に沿うように刀を当て、振りぬく。切り裂かれた腕を男はただ見るだけ…。

痛がることもしなくなった男の首に、刀を当てる。

「悪いな…これも仕事なんだ」

『ふは…はは…ははは！』

いきなり笑い出した男から、俺は少し離れる。

『外史への扉が開いた。まさか、お前のような「北郷　一刀」がいるとは思ってもいなかった。あちらの世界にこの世界の理は存在しない…せいぜい苦しめ！』

男が言ったことを俺は理解できていなかったが、男の胸元から出てきた銅鏡は、怪しく光り輝いている。危険だと、本能が言っている。俺は、ここから離れようと思ったが、何かに足を掴まれ動くことが出来ない。下を見れば、襲撃者の右腕が俺の足首を掴んで離さない。

光がどんどん迫ってきて、俺は光に包まれた。

＊

俺が襲撃者との闘いの後、光に飲まれ、次に目を覚ましたのは、大穴のど真ん中の上に一番深いところだった。太陽が真上にあるから昼時か？

俺の服装は、上下が漆黒の袴。左手には鞘に入った村雨。足に黒のスニーカー…せめて、草鞋か下駄にならなかったのか？　それ以外の持ち物は無い。

身分を証明する国民証も、家と連絡するための携帯も無い。俺は、俺の世界から放り出された？

とりあえず、辺りを見るために、何故か大穴の一番深いところにいた俺は外に出ることを最優先にして登り始めた。だが、進めど進めど砂が崩れるばかりで上には一向に上れない。一種の蟻地獄か？はぁ、こんなことで北郷の技を使わねばならんとは、でも背に腹は変えられない。

「舞うがこと、鳥の如く」

気を腰から膝を通して足首から足先へとめぐらせる。少し、腰を落として俺は空高くに飛翔した。

力は抑え目にしたから、せいぜい１５ｍそこらだと思うが大穴から出ることも出来たし、少し行った所に集落があるのも見つけた。

大穴の外に降り立つと目の前に２人の少女が現れた。（注：２人が現れたではなく、一刀が２人の前に下りてきたが正しい）

「……」

「……」

会話がない。当たり前か。

俺の前にいる２人の少女。

１人は、薄紫色の髪を持ち、きめの細かい小麦色の肌。大きな瞳はまるで磨きかかったアクアマリンのように煌めいていて、見るもの全てを魅了する。かくゆう俺も、見惚れるほどだ。

もう１人は、濃い紫色の髪を束ね、武術を極めようとする者に見ら

れる均整が取れた上で引き締まった身体、アメジストのような色をした瞳は俺を睨み、警戒を怠らない。だが、それを抜きにしても２人ともかなりのレベルの美少女だ。

「…おまえは、何者だ？」

一

『一・恋姫と、北郷家当主』

私たちが彼と出会ったのは偶然の賜物だった。

母が死に、姉と妹と離れ離れになり気が沈んでいた私は、心から信頼する思春を連れて街を散策していた。正確に言えば建業の街を２人で歩いていただけ。姉である孫策が袁術の客将となったのは、この地でも話されている。裏道の方に耳を傾けると、「孫呉はもう…」という声がちらほらと聞こえ、胸が締め付けられた。共にいた彼女は剣を抜き、彼らを問い詰めようとするが私はそれを制して、街の外に足を向ける。

「蓮華さま…」

「力が、民を守れる強さがほしいわ」

私に力があれば母さまを死なせたりすることなんてなかった。母さまが死んでいなければ袁術などに、領土を掠め取られるようなことにはならなかった。姉さまやシャオと離れ離れになるなんてことなかった。皆がばらばらになるなんてことなかった。

「力が欲しい！」

江東の民を守れる力が！　姉さまたちと共にいられる力が！　そう…力が！

そうやって力だけを追う私を嘲笑うかのように空から光に包まれた

何かが降ってきて、私たちの行く道を消し去った。

私と思春は目の前に出来た大穴から少し離れたところで放心していた。

光に包まれた何かが落ちてきた所まではいい、問題はその後。大穴から黒い何かが飛び出して私たちの前に降り立ったのだ。

まず分かったのは性別。女にあるものがないし、服の隙間から見える鍛え上げられた胸の筋肉と割れた腹筋。思春のようなしなやかな筋肉ではなく、力強い印象を受ける。

身長は私たちよりも、頭の1つと半分くらい大きい。彼の鎖骨辺りに私たちの頭がくるくらいだ。

濃い茶色の髪は風に吹かれてさらさらとなびき、漆黒の瞳は何故か吸い込まれるような感覚に陥る。顔つきはきりりとしているものの、私たちに対しては警戒も油断もしていない。自然体、母さまが民に接する時と同じ雰囲気だった。

＊

思春が腰につけている剣を逆手に握り締めながら目の前にいる男に問う。貴方は誰なのかっていうことを。

「俺は、北郷。日本皇国の天皇の護衛をしていた。ここは、どこなのかを教えてもらいたい」

「にほんこうこく？　何処の事だ」

江東の地にはもちろん、ここ近辺の地名ではない。

彼は地面に転がっていた小石を拾って、地面に線を描き何かを形とっていく。地面に描かれたのは大陸。しかし書かれていたのは私たちが見たことの在る地図ではなく大陸の全貌。私たちが世界の全てだと思っていた大陸は、彼が描いた地図の中では１０文の１程度しかなく、私たちは大陸の他にも世界が広がっていることを知った。だが、彼が指差したのは広大な大陸ではなく、小さな島国を指して、ここが「にほんこうこく」だと言った。

私の中に疑問が浮かぶ。この男、『北郷』は何者なのかということ。江東の王の娘だった私でさえ知らなかった世界を、彼は何故知っているのか？

「ここは、建業よ」

一応正直に場所を教えてみた。すると、一瞬だけ呆けた顔をして目を見開いた。その様子を見るからに彼は知っている？

「今の皇帝って、霊帝…だっけ？」

「…そうだけど」

次に問われたのは常識のはずの皇帝の名前。思春の答えを聞いた彼は腕を組み。「そうか」と呟いた。つまり、皇帝の名を知っていたにも関わらず、確認するかのように聞いてきたということ。

「じゃあ…黄巾党って知っているかい？」

私と思春は顔を見合わせる。思春は小さく首を横に振った。私も知らない。

私たちが知らないということを彼に伝えると、1人で納得して次の質問を問いかけてきた。

「えっと…孫呉の王って、孫文台さまでいいのかな？　出来れば仕官したいんだけど」

「……孫堅さまは、お亡くなりになられているが？　知らんのか？」

母さまのことを聞かれた。私は露骨に答えたくないと顔を顰める。その態度を見て感じてくれた彼女は私に代わりに彼に答えてくれた。母は死んだということ。そう…母さまはもういない。

「ちなみに、それはいつのこと？」

「半年ほど前だ。劉表との戦いの折…な」

俯いていた私を思春が前を向かせる。そこにいたのは、母。『孫文台』の死を知って取り乱した彼の姿。慌てたように次の質問を投げかけてきた。その声に先ほどまでの余裕はなかった。

「孫伯符さまは、今どちらに？」

「荊州の方にいらっしゃる。…袁家の客将となってな」

「反乱の目処は？」

「「…！？」」

今、なんて言った？

反乱の目処？　領土を奪われ、兵を奪われ、家族をばらばらにされたばかりの私たちにそれを聞くの？

「貴様！　よくも蓮華さまに！」

思春は彼に斬り掛る。思春…いえ甘寧は、将軍として兵を率いるほど才を持った人間だ。その内に秘める強さは、今は亡き母さまも認めていた。大の大人、男にも劣らぬ強さ。だから、私は彼女を疑わなかった。こいつは、この男は危険だと私も思ったから。組み伏せて尋問でも、拷問にでもかけて洗いざらい吐かせればいいと…思った。思春が力なく彼を見上げるまでは…

＊

異世界に降り立って、俺の疑問・質問に答えてくれていた少女たちは、俺が問いかけた1つの質問を皮切りに俺を敵、もしくは超注意人物と断定したみたいで攻撃をしかけてきた。

剣を逆手に握り振りぬく攻撃。これを為したのは濃い紫色の髪を持った方の女の子。とりあえず、『水』の構えを取る。北郷家の技である風林火山の派生の技である「流れること、水の如く」を展開する。俺から見て左方向から来る攻撃を左肘で剣筋を変え、首を傾けその攻撃を避ける。攻撃が受け流されたことにより、驚愕の顔持ちになる少女の顎に気を纏った掌低を当て行動不能にする。

膝を地面につけた少女は自分の意思とは裏腹に震える手足を呆然として見ている。それは、もう1人の少女も同じ。この娘が負けるとは思っていなかったような顔つきだ。

「あ～…。悪い。ここまで、する気は無かったのだが」

「信じられるわけ無いでしょう！」

攻撃をしかけてきたのはそっちだろうに。どうせ、力付くで押さえつけ尋問か拷問で吐かせるつもりだったのだろうけど、あいにく俺はマゾヒストじゃないので遠慮願う。

薄紫色の髪を持った女の子は、膝をついて放心する彼女に駆け寄り涙目で抗議してきた。

「何が目的なの！」

目的だと？

元の世界に帰る　↓　仕事放棄と見なされ親族と他四家からフルボッコ

世界制服…征服　↓　三国志の英雄を1人で相手…自殺行為か？

この世界でのんびり　↓　無職で？

英雄に混じって歴史に名を残す　↓　残さなくてもいいけど、闘うだけで金をもらえるのってこれくらいじゃねぇ？

「あ、あのさ？」

「何？」

「君さ、名家の娘さんか何かだろう？　商家とか武家とかの。よかったら、俺を雇わないか？」

「はい？」

弐

『弐・天の国の武人』

齢を１５とした少女の周りの環境は１つの事柄があってから息つく間もなく変わっていった。

母が死んだことによって、今まで傘下にいた諸侯が掌を返し敵となり、友好関係を築いてきた諸侯にさえ跳ね返りを受けた。そんな孫家の隙を見逃すわけも無く、孫文台が治めていた領内は大方袁家に吸収された。

姉は孫家や仕える家を守るために己の力を袁家に売り、客将となった。しかし、袁家は孫家を飼い殺しにするために彼女ら姉妹をばらばらに住ませ、諸侯も徒党を組まないように各地へ散らされた。

このままでいるものか。必ず、江東は、孫呉は取り戻して見せると皆で誓ったものの、その目処は立っていない。兵を募ろうにも袁家の目が向けられていて、表立った行動を取ることはできない。

今、自分達で率いているのは数にして２０００人くらいの兵。袁家・・・姉さまを客将としているのは、袁術。彼女の兵力は１０万。比べ物にならない・・・・・・

本当に母が治めた土地を、民を取り戻すことが出来るのか。不安になっている時期に、彼女は出会った。

天から落ちてきた、漆黒の衣を纏いし武人に・・・・・・

＊

庭先から聞こえる、気合の声に私は目を細める。

剣を逆手に握り、勢い良く振りぬいているのは自分が最も信頼を寄せる部下である甘寧。真名を思春。

その相手をしているのは、先日舞い降り、その日の夕刻には私たち孫家の客将となった北郷。真名を聞いたら「一刀（かずと）」と言った。

２人は朝から稽古を続けている。

先ほどまで自分もあの２人に混じって稽古していたのだが、これから勉学があるために早めに切り上げた。

自分の剣は母親である孫堅から学んだもの。思春も我流で編み出した剣だが、そこらの兵の１０人をまとめて相手にしても勝てる自信がある。だが、私たちの自信（プライド）は彼と闘うことで粉々に砕かれ砂になった。たぶんそこら辺を舞っていると思う。

思春は汗だくになって、時折腕で汗を拭い彼に向かっているが、当の彼は涼しい顔から一向に変化が無い。汗もあまり掻いていないし、なにより刀を一回も抜刀していない。鞘に入れたまま闘っている。

思春の攻撃を軽くいなしたかと思えば、足を払い身体の軸が崩れた彼女の背中を押し、草むらに突撃させる。彼女は「頭隠して、尻隠さず」の状態になる。

思春の下着はふんどしだから、あの格好だと彼には・・・・・・丸見えなんだろうな。私はそう思いつつ、心の中で合掌した。

草むらに突撃したままの思春を不思議に思った彼は、彼女に近寄っていき両肩を持って立ち上がらせたが、彼女は崩れ落ちた。どうやら、体力をすべて使い果たしたらしい。北郷に連れられ、私の前に来た思春はぐったりとした状態で述べた・・・・・・。

「世界は・・・・・・広いのですね。蓮華さま」

「そうね」

北郷はどこ吹く風と、顔を背けている。

理由は分かっている。私たちの現在の格好が問題なのだ。私は、まだいいとして、思春は汗が全身から吹き出てきている服がぴったりとくっついていて、身体の線がはっきりと見えているからだ。胸の先っぽも、へその形も・・・・・・・。

私は思春の肩を担いで井戸の方に向かう。彼はというと、刀を横向きに置き、座禅を組み、目を閉じている。曰く精神を鎮めるものだと言う。

「思春・・・どう？」

「剣の稽古は、孫堅さまや、雪蓮さまたちに見て貰った事があるので、自信があったのですが・・・・・・。ここまで、子供扱いを受けると逆に、まだまだ未熟だったのだと自覚しますね」

ゆっくりと井戸の方に向かう私たちは、彼のことを話しながら歩みを進める。

『北郷　一刀』　齢は１８歳　私たちの世界でいう皇帝の直属の護衛官を勤めていた武人。

出会ってまだ5日目だが、損得勘定抜きで私たちに接してくれる。

武術の面では私たち2人とは雲泥の差。むしろ稽古してもらっているという錯覚に陥る。

知の面では、文字に関しては壊滅的だが、政策、資金運営、農業・漁業の効率化、兵の鍛錬方法、海兵の設立など、天の国の知識を生かしどんどん提案してくれる。でも、悲しいかな。私と思春、孫呉に組する文官に彼の話を理解できる人間がいないのだ。たぶん冥琳か穏辺りなら分かるのだろうけど・・・・・。

そちらの方の技術提供は、まだいいので兵の鍛錬を任せることにしている。

けど・・・・・北郷みたいな兵がたくさん出てきたら、私たちが率いる意味がないような気がする。だから、程ほどにしといてもらいたい。

＊

「―――ふうっ・・・・・・」

俺は目を開け、体操を行う。

身体能力の低下は無いみたいだ。むしろ前の世界にいたときよりも気の流れが手に取るように分かる。問題は、その力加減。油断したら、ばっさりといってしまうかもしれないので、今現在鞘に入れた状態で彼女らと稽古している。最初は渋っていたのだが、俺との実力差が分かってくると何も言うことは無くなり、時折ヒヤッとする攻撃を仕掛けてくるが、まだまだかな。

世間の動向を見ていても、ここらに黄巾党の話は出ていない。ということは、まだ時間があるということ。今の彼女らの実力じゃ心もとないので、根本的な部分から鍛えることにした。

その肝心の彼女達は井戸のところで上半身裸で水を浴びている。見たいけど見たら駄目だ・・・・・・。甘寧は髪を下ろし魅惑的な格好で惜しみも無くお椀型の胸を晒している・・・・・・。ご馳走様です。

孫権の方は背中しか見えない・・・チッ。

俺は何をやっているんだ。俺の世界ではまだ、中学生の歳の女の子達だぞ・・・。まぁ、あと2年もすれば・・・・・・

「がぁぁぁぁぁぁ！！！」

落ち着け俺。素数は2・3・5・7・11・・・・・・・

俺は孫権に言われるがまま、孫家の客将となった。ただ、今は零落しているため、あっちの世界で言う給料は期待しないでくれだそうだ。いやいや、住む所とご飯が貰えるならどこだっていいよね。

問題があるとすれば、俺の方だった。俺は日本語でしゃべっているつもりだったのだが、この世界の文字を見て固まった。Ｉｔ、ｓａ　漢文！！

なんとなく言わんとすることは分かるのだが、読めんのだ。ちょっと、読めないかも～、と２人の顔を窺ったら「人には欠点があるものよ」と言ってくれました。これでも大学に通っていたのに・・・ｏｒｚ

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか孫権は、兵を鍛えるように願ってきた。

袁術の目がある以上、表立った兵の徴収はできないとのこと。なら、質を上げようという話。兵たちへの説明はここ２～３日で終わらせるそうなので、俺は自分にできることをしようと思う。

弐（後書き）

2～3日中には必ず・・・

参

『参・誘拐犯と、北郷の技』

北郷家の技は、全てが気を身体に巡らせて放たれる。腕に気を込めれば、根本的な破壊力が生まれ。足に集めれば神速の移動速度を得る。気の使い方は四家一だった。全身に溜めておくことも、維持することも、放つことも可能だった。その線において、先祖返りした一刀は見張るものがあった。気の内服量が多いにもかかわらず、外気からも取り込むことが出来たためだ。

一刀が若干１６歳にして、北郷家の当主になれたのもこの類稀なる能力があってこそだった。そして、一刀は好奇心と探究心が強すぎて何度か暴走したこともある。その行為が今の彼の強さに繋がっているため文句は無いのだが、やった当初は両親と親戚一同から非難された。

北郷の技の基本は「風林火山」　そして、この技の弱点を補うために１００代かけて生み出された「水鳥陰雷（フウスイリンチョウカインライザン）」である。呼びにくいので一刀はつなげて「風水林鳥火陰雷山」と読んでいる。

四家は一般人から見たとき確実に人間兵器として見られるのだが、顕著なのが北郷家だった。

車より速かったり、ガトリング砲の連射を尽く避けたり、ヘリのコックピットに貼り付いてプロペラを斬鉄して落としたり、熊や猪を一刀両断したり、マラソン選手よりも速く走っておいて疲れを見せなかったり、変な伝説も多々残る摩訶不思議な家系。

ちなみに一刀なら全てをやれるだろうと、他の四家の面々は見ていた。

だから・・・馬に乗って、弓矢を放ちつつ、逃げるようとしている彼らには、最初(ハナ)から勝ち目が無いのだ。

＊

着る物が一着しかないといろいろと大変なのだった。まさか邸を半裸で移動するわけにもいかないわけで、俺は少々孫権からお金を借りて、衣服を買いに来た。俺としては、楽なハーフパンツに、Tシャツでもあればいいなと思ったのだが、すぐに気付いた。

「ここ・・・日本じゃないんだった」

俺は適当な店に入っては出て、入って出てを繰り返してオーダーメイドで作ってくれる店を見つけ出した。とりあえず一着あればいいだろうということで、黒色の上下の服を適当に書いて、背中の方に十文字が来るようにしてもらい、前金を払って俺は店を出た。ただ、店主が「ここをこうすれば・・・」と呟いていたが、本当に大丈夫なのだろうか。

建業の町並みは寂れているわけでもなく、賑わっている訳でもない。普通の街だ。

孫権が王になって、ここが首都になればまた違う一面を見せるのかもしれないが、それはまだ先だろう。

俺は屋台で売ってあった肉まんをひとつ買って、大通りを見ていた。大通りといっても日本みたいに道路が2車線あって歩道があるわけではない。店は出っ張り、屋台は通り、荷車が通ったり、子供が遊んだりしている。

区画整理をしたほうがいいんじゃないだろうか？　公園を作ったりしたほうが子供達も親も安心して遊べるだろうし『どけ！ゴルァア！！』・・・・・なんだ？今の・・・

怒涛の勢いで馬が通りを駆け抜ける。その数8頭。それぞれに男と、小さい女の子が乗っていた。

それを見送った後に通り過ぎる孫呉の鎧をつけた騎兵たち。追われるものと、追いかけるものの構図は、この時代だと・・・・・・

『娘をたすけてください！！――――――』

耳に入った家族の悲痛なる叫びは、俺を走らせた。

＊

相手は、山賊。

馬の扱いがうまく、こうやって街中で人を攫って、売るのを生業としている。やっと見つけたのに。このままでは、外に逃げられてしまう。

相手は大人の男8人。子供を乗せているとはいえ、鎧をつけている

私たちよりも速度が速い。

どうして、私たちには力が無いのだろうか？　力があれば、ここに暮らす人々だけでも守れることが出来るのに。もう時間が無い。門より先に出られては追うことは不可能になる。どうすれば・・・・・・

「君が、隊長さんかい？」

「ふぇ！？　は・はいいいいいぃぃぃ！？」

私は声を掛けてきた男性の方を見て驚愕の声をあげた。だって、私は今馬に乗って移動しているのに、それに合わせる様に走っているのだ。

「あの８人全部倒しても大丈夫かい？」

「え？・・・・はい」

「じゃあ、捕縛の方よろしく・・・・。疾きこと、風の如く！」

呟いたその瞬間には消え、前を走っていた馬から男が蹴り落とされた・・・・・・。嘘だ・・・うん。これは、何かの間違いよ。

私が思考している間も男達が蹴り落とされて、最後には馬８頭を静め、少女たちを馬から降ろす彼の姿があった。子供達は全員無傷で、泣いている子もいたけどいたって元気だった。

しかし、そんな安穏とした空気は消え去る。

山賊の男達が足や手を引き摺りながら、こちらの方に向かってきたのだ。

私は槍を構える。せっかく助け出した子供達にこれ以上、怖い思いをさせないために・・・・・・。

『いくぜ！野朗共！！』

「「「「「おおおーーー！！」」」」」

向かってくる男達、私はしっかりと見据え交差するのを待った・・・が、子供達を救出してくれた男性が私の前に立ち、男達を一蹴する。

上段回し蹴りを受けた男の首は胴体から離れ、通りを転がり虚ろな瞳で晴天を見上げる。足を払われた男はうつ伏せに倒れ、背中に踵落としを喰らい大量の血を吐き出す。剣を握り締め振り下ろしてきた賊の手首を掴んで砕きつつ、男を振り回し地面に叩きつけ、物言わぬ肉塊になったところで残っていた男達に投げつける。男性の力に恐れおののいた男達の内2人が街中に向かって逃げ出すが、私の目の前に居た筈の男性が消えたと同時に逃げ出した男達が宙を舞い、落ちてきたところを蹴られて地面に叩きつけられ骨が砕かれる音が辺りを包み、立っている者が彼しかいなくなった。

子供達は全員気絶している。

いくらなんでも、やりすぎではありませんか？

＊

やってしまった手前どうしようもないな。

子供達は全員倒れているし、指揮していた騎兵隊の隊長の女の子は俺のこと睨んでいるし・・・・・・よし！

「三十六計逃げるにしかず・・・」

俺は逃亡を図った。

「って！？　ちょっと待ってくだ――――――」

聞こえない。俺には何も聞こえない。

帰りに服屋によって、頼んだ服を貰ったのだが・・・・・・。

店主はにこやかに笑い己が作ったものを誇らしげに渡してきた。確かに、黒色の上下の服、背中に十文字が入り、俺が注文したとおりの品にしやがっているのだが・・・・・・

「なぜに・・・虎の刺繍が入っているんだ・・・・・・」

なんかとんでもないものが出来上がりました。

四

『四．当主の部下』

孫権と甘寧の説得を受けて、俺の元に稽古を受けに来ることになったのは数にして1人だった。

まぁ、江東の虎と呼ばれていた英雄に鍛え上げられてきた兵たちが、孫家の客将という身分を貰っているとはいえ、名声も無ければ実績も無い俺の元に来る筈がない・・・と。

まぁ、0人じゃなくて本当はほっとしているのだけどね。

日課となった孫権と甘寧の2人を相手にした稽古も中々様になってきた。今までは我武者羅に突撃してきた甘寧も相手の動きを読むことを覚え、幾分か剣筋に鋭さが出てきている。緩急をつけることにより、彼女の良さが伸びてきている証拠だ。

稽古を始めた当初は、真正面からしか向かってこなかった孫権は、俺の脚捌きを真似しながら攻撃を受け流せるようになってきた。孫堅と甘寧の実力は今の同等かなってとこ。

今2人で試合をしてもらっているが、決め手が無いのがちょっとね。

それに今日から来るって聞いていたんだけど・・・・・・

すると、門の方から黒い馬にまたがった少女がやってきた。赤みがかった黒髪をポニーテールにして、エメラルドグリーンの瞳が特徴の女の子。馬から飛び降り、地面に降り立つと同時に、前掛けがふ

わりと空気抵抗を受けて捲り上がった。

「ブラボー！」

ちょうど真正面にいた俺は、ばっちりと目撃した。

食い込み気味の縞パンの逆三角形を。

「お初にお目にかかります。孫権さま。甘寧将軍。えと、北郷さま。・・・凌統と言います。よろしくお願いします！」

彼女の声は鈴振るような声で元気な声だった。だが、そんな一時的な安穏もすぐに終わる。彼女は、俺を見て固まり、肩を振るわせ、俺を指差し。叫んだ。

「あー！　馬並みのお兄さん！！」

「馬」

「並み？」

「ぐはっ」

孫権と甘寧の2人が首をかしげながら、つぶらな瞳で俺を見てくる。

俺は村雨に頭を打ち付け血が額から噴出するも、ｏｒｚ状態で止める気になれない。

おぜうさん・・・「馬並み」に足が速いと言うのなら褒めることになるのだが、今の状態だと馬鹿にしているとしか思えないぞ・・・・

・・恨みがましい目を俺は少女に向けた。そうすると、失態に気付いたのか、ぺこりと頭を下げ謝ってきた。

＊

顔合わせが済んだ後、俺は凌統の力を見るために試合をしている。凌統の武器は騎乗槍で、速さを重点において鍛錬して来たらしく、確かに攻撃速度、連撃ともに一級品だ。だが、速さと当てることばかりに気を取られ、握りが甘くなり、威力が無い。蜂のように毒があって数を食らわせれば良いと言うわけでもない。

同じ槍を使って闘っていた好敵手と書いて、親友と読む友人の『東峯院　拓馬』なんか、槍の速さは神速、威力は厚さ８ｃｍの鉄板を軽く貫き、防弾ガラスも輝を一切入れずに貫くことが出来るくらい正確で緻密な突きを繰り出していた。

四家の当主と比べるのは、凌統に可哀想な気がするので言わないが、今のままでは将来本物と戦ったときに命を落とすかもしれない。いっそのこと、３人に気の使い方を教えて、北郷の技を一つずつ教えようかな・・・・・・

部下の話だって、俺というイレギュラーな者に教えを請うてきたのはこの凌統、ただ１人。

俺自身が兵を鍛えるのではなく、強くなった彼女達が兵を鍛えれば良い。俺は、俺でまた出来ることを探す。例えば、孫文台を知らない若い世代の子供たち―１３歳から１６歳くらいまでの子―に勉学

や鍛錬を施して、俺の部下として雇って、そのまま孫呉の戦力にするとか。もしくは、道場を開いて門下生を集め、まとめて孫権や甘寧の部下になるように手を回すとか、いいかもしれない。

だが、この考えにはやはり、名声と資金が必要になってくる。手っ取り早いのは、盗賊、山賊、江賊、海賊の討伐だろう。資金の方は、賊の宝からちょいと拝借すればいい。いや、駄目だ。3人にばれた時、何をされるか分かったものじゃない。「あ・あの」

資金の方は、別のことで稼ぐとして名声の方はどうにかする必要がある。

そういえば、昨日の誘拐騒ぎって、街中で起きたんだっけ。普通はありえないよな。警察や自警団があって、大人たちも目を見開いて子供達を守る世の中なんだから・・・？　いや、待てよ、この世界は三国志の平行世界。三国志の時代に警察、交番のシステムって存在していたっけか？　「ふみゅ・・」あ、そうだ。愚帝といわれた霊帝だけど、唯一残した良いものが警察の基盤になるんだっけ。ということは、今の建業って犯罪が跳梁跋扈している危険な街なわけ？　今すぐにでも改良する必要があるな。

とりあえずは、付近の山賊や盗賊団を討伐して、区画整理し街に住む人たちが安心して生活を送れる環境にしないとな。「きゅう・・・」

おや？　俺の前で心身ともにボロボロになった凌統が倒れこんでいた。

孫権と甘寧が俺を見ながら震えている。

もしかして、やりすぎたか？

＊

北郷に部下が出来た。名を凌統。真名は椿。

建業に来た時に見かけた騎馬隊の隊長を務めていた、私や思春の１つ上の女性だ。だが、身長は私たちよりちょっと小さく、幼い感じを受ける。

北郷と対し合って、稽古をしているが正直親子で戯れているように見えない。少なくとも最初はそうだった。凌統の武器は騎乗槍。速さに重点を置いた闘い方だ。今の私や思春では、避けきれる速さのものではない。そう考えると彼女もまた、いくつもの死線を越えてきた武将なのだと、つくづく思う。

でも、その上を行く北郷って何者だろうか。

私たちから見た彼女の攻撃は神速なのだが、北郷は別の何かを考え、考察し、何の捻りも無く避け続ける。彼女の方は頬を赤くさせ、肩で息をして、全身から汗が滝のように流れ落ちている。北郷の方は、相変わらず涼しい顔をして両手を組んで、何かを思考している。

凌統は、北郷が自分のことを見てくれないことに怒りを感じたのか、槍を横凪に払い一撃を加えようとしたが、片足で止められる。ちなみに、北郷は軌道も凌統も見ていない。完全に無意識下で止めている。

一度、凌統が殺気か何かを出してから、北郷の動きが変わった。手加減が施されているかのように見えたが、彼女の攻撃の隙を突いて足を払って転ばせたり、軸をずらして尻餅をつかせたり、勢い良く突き出した右腕を引きその場で独楽のように回転させたり、それはもう目も当てられぬほど悲惨なものだった。

ついに、彼女は力尽き、地面に屈しうつ伏せで倒れる。攻撃が無くなった事にやっと気付いた北郷は、首をかしげている。ということは、今の今まで自分がやっていたことを知らないというわけで・・・・・・

私たちは抱き合いながら、怯えた。下手したら明日からの稽古はこんな形になるかもしれないのだと。

＊

凌統は、孫権と甘寧の2人に連れられ水浴びタイム。

おお。小さい身長に不釣合いなナイスバディ・・・・・・orz

だから、なんで俺はこんなことばっかりしかやっていないんだ。

そりゃあ、あんな超絶ヒロイン級のチラリな部分を見ることができるのは嬉しいし、眼福物だと思うが。なぜ、こんなにも反応するんだ？　男の性か？　それとも、前の世界で恋人を作れなかったから、本能が欲しているのか？

区画整理とか、賊討伐の話、街の警備のことを色々話さなければな

らないのに、ああ。男ってつくづく阿呆な生き物だなぁ。準備だけでもしとくかな。区画整理の案をまとめて、討伐の日程を調整し、交番のシステムをあの2人と文官に分かるように説明するために、資料をまとめないといけない。

それも大事だが、今は六つの丘を見ることに集中しようか・・・・・・うむ、眼福、眼福。あの3人って絵になると思う、今日この頃。

四（後書き）

次話、一刀と椿の無双予定。
目標は誘拐組織を含む盗賊と、小規模江賊。

伍

『伍．当主の闘い方』

後にRさんは語る。

「この世に完璧な人間など存在しない」ということを。

強くて、優しくて、知識も豊富で、人を引き寄せる何かを持っているあの人にも、知ったら顎が外れるほど口を大きく開く羽目になるくらいの欠点を持っている。

私も街を出た時点で気付くべきでした。

とりあえず、孫権さまたちには伝えてきました。あの人を先頭に出して進軍してはいけないということを。

後で泣きを見ても仕方が無いのです。

そう、私のように・・・・・・

＊

北郷さまの下で稽古に明け暮れること、早3日。今日から2週間かけて、『山』賊の討伐に出かけることになりました。私は、遠征用に荷造りし、馬の背中に乗せ集合場所である北門に向かいました。

はて？　山賊が塒にしている山は、西門か南門から出たほうが早いのですが？　なにか考えがあってのことなのでしょうか？

北郷さまも、すぐにいらっしゃいました。ただ、持ち物が刀だけってどういうことですか？　食料は？　着替えは？　私が質問するよりも前に、北郷さまが口を開きました。

「番号！　１」

「２・・・？」

「出発！」

へ？・・・・・・って、２人で、ですかぁー！？

相手になる山賊は少なくても３０人は入るという話ですよ！　無茶です！　自殺行為です！　と、文句を言う暇も無く、彼はずんずんと歩いていってしまい、私は泣く泣く後を追いました。そして・・・・・・

「北郷さま？　目の前にあるのは何ですか？」

私は彼の前に仁王立ちして、説教することになってしまいました。

私たちの前に広がっているのは、大きな河。文明の母である「黄河」。人は水無くして発展することは無かった。

「いつ見ても素晴らしいですね・・・・・・じゃなくて、山に行くはずだったのに、どうして河に来ているんですか！！」

私も気付くべきだった。建業の北門から出て、ずっとまっすぐ行ったら、どうなるかぐらい分かりそうなものだったものを。私はしっかりと山を指差して、怒鳴るように言い聞かせる。

「いいですか？　あっちですよ」

「ははは。うん、わかったよ。凌統・・・あっちだね」

と、彼が足を向けたのは海に行く方角。

「ちょっと、待てい！！」

私は彼の襟首を強く引っ張り、仰向けに倒す。急に首が絞まった北郷さまはもがき苦しんでいるが、このくらいはいいだろう。

「たった今、あっちって言ったじゃないですか！」

「ごめんごめん。冗談だってば・・・・・・あっちでいいんだよね」

もう、ふざけるのには程が過ぎます。って、あれ？　どこに行かれたんですか？　右にはおらず、先ほど向かいかけた海の方角にもおらず、山の方にもおらず。まさか・・・

『ごぽごぽ』

沈んでるー！？

＊

「ふふふふふ・・・・・・」

「まぁ、何事もおもしろ、おかしく、過ごせば何とかなるよ」

「それ、慰めですか？　一刀さま」

「あれ？」

初日目で見事な方向音痴っぷりを発揮した北郷さま・・・一刀さまに連れられて、東で商隊を追い剥ぎしていた集団を物言わぬ屍へと変え、南で子供を人質に金銭を欲求していた男を八つ裂きにして、西の方で当初の目的と違う山賊の砦を急襲し殲滅、挙句の果てに会稽という街の近くの森で囲まれていた少女を、白虎と大熊猫と一緒に助け感謝され「大きくなったら結婚してあげる」と１０歳程年齢が離れた少女に言われ鼻の下を伸ばした一刀さまを蹴り飛ばしつつ、やっとのことで目的であった山賊の塒の砦へとやってきた。

ここまでくるのに掛かった日にちは実に１ヵ月。たまったもんじゃない。

そして、もうひとつ厄介なのは・・・・・・

「さて、凌統。作戦通り、突っ込むか」

「それは、作戦とはいいません！」

一刀さまは、何気に猪突猛進の猪武将でした。ついて行くことが出来ません。

そりゃあ、彼ほど強ければ何の問題も無いのでしょうけど、私、一般人だと思うんです。武将として、隊長として人を率いてきましたけど、この人に兵を率いらせては駄目だ。絶対、一刀さま以外の人員が全滅する。断言できる。

「文句が多いよ。凌統」

「貴方は私に死ねとでも？」

「え？　敵陣に突っ込んで、敵を屠って、子供達を助けつつ、全滅させる。完璧な作戦じゃないか」

一刀さま。貴方のその無謀的な作戦を支持する自信はどこから生まれるのですか？　ぜひともご講義いただきたいのですが？　大体、子供達を助けつつって、物理的に不可能でしょう？

「一刀さま、ちゃんと敵を見てください！　商人から手に入れた情報では３０人程度という話でしたけど、明らかに倍の人間がいます！見張りの数も一つの牢屋を守るのに８人ついているんですよ！子供達を人質に取られたらどうするつもりですか！」

「別に賊が、３０人いようが１００人いようが関係ないけど・・・」

一刀さんは、何当たり前のこと言ってんのと言いたげな表情をして、私の顔を見る。

え？　おかしいの私？　私なの・・・？

「う～ん。仕方が無い。１対多数の闘い方を見せてあげるから、僕が君に手を振ったら降りてきてね」

何をするつもりなんですか？　一刀さま・・・・・・ここ、崖の上ですよ。確かに飛び降りたら、速攻を掛けることが出来ますけど、その前に死――――――って、飛び降りちゃった！！一刀さまー！？

＊

崖の上に残った凌統が何かを叫んでいるが、風を切る音が邪魔して聞き取ることが出来ない。

まぁ、いっか。あとで、本人の口から聞けば問題ない。そう、俺は気にしない。

凌統の話だと６０人くらいだって言っていたが、それは見えている奴らだけの総数だ。まだ、砦の中や木々に隠れた所にいるだろう。それこそ合わせたら１００人いそうな雰囲気だ。でも、俺にとって数はあまり関係ない。だって、この世界に質量兵器は存在しないのだから。

俺が天皇の護衛について一番苦労した相手は、忍びの血を引き継いだ一族を相手にしたとき。避けるわ、分身するわ、挙句の果てには口から火を吹くわ、ちょっと引いた。

逆に一番楽だったのは、質より量といわんばかりの拳銃や、バズーカ砲を持ち出してきたどっかの軍隊もどき。数は５００人くらいだったかな。相手が攻撃してくる前に懐に入り込んで、暴れてやった。最後は自爆だったし、数がいるから強いっていう訳ではない。

眼下にいるあいつらも似たようなものだろう。むしろ、剣と弓しかない世界で北郷の技から逃げ切れる奴を拝んでみたいものだ。まずは、『陰』から行きますか。

「消え去ること、陰の如く」

俺は気配を自然と同化させ、降り立ったその場にいた男達を４人切り裂いた。その後、すぐに砦の中に入り込み１人ずつ狩っていく。目の前で仲間が死ぬのを見届けた奴らは、呆然とし仲間に知らせようと大きく息を吸う。俺はその瞬間に首を刈り、その先を言わせない。

襲撃に気付いた賊が外に集まってくる。その中心に風格ある人物が現れる。無精髭を伸ばし、身体は筋肉を隆起させたムキムキのおっさん。４０前後かと思われる。

確かに威厳がありそうだが、素人だな。あんな分かりやすい場所で、何の障害も無く、背中を俺に見せている時点で、殺してくれと言わんばかりの格好だ。そんなにもお望みなら、部下の前で真っ赤な大輪を開かせてやるよ。もちろん、お前の血でな！

「動くこと、雷挺の如く」

俺は、砦の床を踏み砕き、神速の勢いを持って、頭領格の男の身体を頭から股座にかけて、一刀両断した。そして、俺はそのまま賊が集まっている所に降りる。周りの男達は呆然とした面持ちで俺を見て、物言わぬ屍となったお頭見て、剣を振り上げ大声を上げて俺に向かってきた。

「静かなること、林の如く」

心を静まらせ、相手の動きを読む『林』。俺は、男達の攻撃を紙一重で避け、一閃の名の元に向かってきた男を1人ずつ屠っていく。15～6人斬った辺りで、攻撃が止み俺から離れていく男達。その中の1人が牢屋の方を見て駆け出した。恐らく、人質にして状況を翻そうとしているのだと思うがさせるわけ無い。

「疾きこと、風の如く」

男が牢屋に駆け寄る寸前に俺が先に牢屋に辿り着いた。

男は目を見開き慌てて方向を変えようとするが、俺が横に薙いだ村雨に胴体を断ち切られ肉塊と化す。

辺りが静まり返り、砦の中に赤い血の海が広がった時点で立っているのは俺1人となり、唯一残っている山賊は1人だけとなっている。年齢は20歳代前半、働き盛りの人間。

男は、近くの村に女房と子供がいる。生きていくためには仕方なかったと、頭を擦りつけながら俺に命乞いをしている。

俺は無言のまま男の首を刈り刎ねた。

畜生道に堕ちた時点で、情けを掛ける必要はなくなっている。自分の子供を生かすために仕方なく、他人の子供を売っていること自体、気に喰わない。蛙の子は蛙というし、こいつの子供も殺したほうがいいのかもしれないが、それは成り行きを見守ろう。似たようなことをするような奴になったら、俺が殺しにいけばいい。

俺は、村雨を一振りし血を飛ばしてから鞘に納め、牢屋の方に向か

う。すると男の子3人、女の子6人、若い娘が1人いた。全員、俺が近づくと牢屋の隅に固まって怯えた目つきで俺を見てくる。声を掛けるも返事が無い。手を伸ばすと女の子数人が泣き叫び、若い娘が俺を睨み叫んだ。

「この鬼畜野朗！　私たちに触ろうとするな！！」

きちく・・・KI・TI・KU・・・鬼畜。

助けたはずの子供達に怯えられ罵倒された俺は、おぼつかぬ足取りで崖上から見える位置に行き、彼女に向かって手を振った。そして、俺は・・・・・・

＊

え～と。とりあえず、牢屋に捕らえられていた子供達は健康そのもので命に別状は無い。

一刀さんも身体的には無傷だったのだが、精神面的に鋭い剣を突き刺されたようで隅の暗いところでいじけている。大の大人がやる行為ではない。子供達も助けてくれた恩人に、悪いことをしたんじゃないかと謝りに行っているが逆に暗くなっていっている。

これからの方針としては子供達をそれぞれの村に送り届けた後、建業に帰る予定である。今度は、私が前に立って彼を引っ張っていかないと。もう、あっちこっちに行くのは勘弁して欲しい。

お母さんに会って、抱きしめて貰いたい。日常に帰りたい！

私の切なる願いは・・・・・・叶わなかった。

次話に続く！！　って、続くの！？

伍（後書き）

さて、次話ではフラグを立てに出張します。
椿ちゃんは、ホームシックに掛かっていますが、帰れるのでしょうか。

六

『六．気配を読む』

「気配は、この世界にある全ての物に存在する。生き物だけではなく水や火、風や大地、草にも石にもある。生きているものにはそれに似合った気配が、そうではないものにはそれ相応の気配を持っている」

暗闇から一刀さまの声が聞こえる。私は先に進むことが怖くなって足を踏み出せないでいる。

「すなわち、今いるこの洞窟にも気配はある。しかし、凌統。君は『見る』ことに頼ろうとしていて足を踏み出せない。見るんじゃない、『感じる』んだ。それができるようになれば、感覚で周囲の状況を予測・把握することができる」

そんなことを言ったって……。

「そうそう。あまり長いこと暗闇の中にいると後々大変だからね」

「うえーん！！」

誰か助けてください！　むしろこの妖から私を救い出してー！！

＊

先日の山賊を討伐し子供達が覚えている限りで近くの村を回り、全員を親の元に送り届けたまでは良かった。安心して、ホッと一息ついた私は彼の後ろを歩いてしまった。気付いた時には木々が覆い被さって日の光がまったく届かない深い森の中を彷徨っていて、挙句洞窟に入り込んでしまったみたいなのである。

一刀さまは止まることなく歩き続けています。前も後ろも真っ暗で、壁がどのくらいの場所にあるのか、そもそもここから出ることが出来るのか不安になる。

1人残されるのはいやなので、彼の後を一生懸命になって追うのですが。

「いたい！」

凸凹の地面に躓いて転び、

「ぎゃっ！？」

正面が壁になっていることに気付かずに突撃し、

「いたっいたたた！」

私が立てる音に反応した突撃してくる蝙蝠たちを避けることが出来ず。

少し前を歩いていた一刀さまは無傷。私は服も身体も心もボロボロ。

帰りたいよう、お母さん…

「凌統」

「…はい」

一刀さまの手が私の頭を撫でる。優しくてあったかい。

「少しだけ、ほんの少しだけ力を貸してあげる」

一刀さまがそう呟いた直後、おかしな感覚に包まれた。

冷たくもなく、かといって熱いわけでもない丁度いい、私が気持ちよいと判断できる温度。そんなお湯の中に私の体がすっぽりと納まった感覚。さっきまでと違うのは、周りの環境が見えていないのに視えていること。視覚で捉えることしか知らなかった私が、感覚だけで周りを視ることが出来ているということ。

「ッ！？」

首を狙った1つの斬撃。

私は半歩下がりそれを避け、放ってきた者に対して槍を突…かないで急いで距離をとる。私の体が在った所を物凄い速さの打撃が通り過ぎる。通り過ぎた後に見えたのは脚。1撃目の首を狙った攻撃は囮で、最初から狙いは蹴りを当てることだったのだ。

私の前にある気配は、左右に揺れたかと思った瞬間に掻き消える。さっきまでの私じゃ追うことすら出来なかったその姿は、後ろに。槍を両手で構え後ろに放つ。

乾いた音が私の後ろで鳴り響く。私の槍が獲物を捉えた音ではなく、石が地面に落ちただけのモノ。

どこに…？

「ふむ。汗ばんでちょいとTの字になっていますなぁ。お嬢さん」

違和感がありまくりのこの発言。私は恐る恐る眼下を視る。そこにいたのは、私の服の前掛けをひらりと持ち上げ、私の下穿きをじっくり眺める一刀さまの姿。

「死ね！！」

私は彼に向かって蹴りを放った。

「はあぁぁー！！」

私の持ちうる全ての力を使って女の敵と成り代わった男に制裁を与えるが為に槍で突く。足で場を掴み、腰の回転、腕の伸縮、手首と腕の回転を掛け合わせ突く。　突く！　突き破る！

彼は私の攻撃を鞘で弾いたり、軌道を変えたり、無力化する。

「すごい攻撃で、いくら数を放っても当たらなければ意味が無い。加えて言うと、怒り狂っては気配を読むことは不可能だよ？」

彼に言われて初めて気付く。周りはまた暗闇の世界に逆戻りしていた。それと同時に、今まで戦っていた一刀さまの気配も暗闇に紛れ、私は独りになる。襲ってきたのは、今まで視えていたものが見えなくなって取り残されたという現実。戦いで火照った身体は震え出し、どこかで落ちる水滴の音は私の心臓を鷲掴みにし恐怖を駆り立てる。

「あ…ああ…うわあぁぁぁ！！」

私は槍を捨てて、頭を抱えしゃがみこむ。

怖い。怖い…

ふわっと頭に置かれた掌。目の前に一刀さまがいる♪　私は彼に抱きついた。

＊

さて男性諸君、ストレス共有理論というものをお知りだろうか。

同じ空間にいる2人が同じストレスを受け続けていると、その2人は『恋愛』によってストレスを解消しようと無意識に働き合い、恋に落ちるというもの。

凌統は、暗闇という「見えない」不安によって己の恐怖を追い込み精神的負担（ストレス）を生み出し、結果この状況を作り出した当人である俺に抱きつき、その柔らかい肢体を何の惜しみもなく絡みつかせている。

「一刀さま…？」

凌統はくりくりとした瞳を俺に向け首を傾げている。

ヤバイ！　こんな予定ではなかったのに。

俺としては、暗闇で前も後ろも分からない状況で、気配の読み方を身体と感覚で覚えてもらい、俺が与えた気が切れた後、己の気を引き出し俺に一撃を加えたところで種ばらしをして、洞窟から抜け出

そうと思っていたのに！　なんだこの状況は！

凌統、目を覚ませ！　俺は君に酷いことをしているんだぞ！

四家のひとつである北郷家の当主が道に迷っていたら護衛者を守ることは出来ないに決まっているだろう。だから俺は、自分の評価が下がってでも人に聞くことは欠かさない。最悪、『鳥』で跳び上がり上空から位置を確認する。自分が極度の方向音痴であることは百も承知だった。

俺が態々凌統をつれて西へ東に珍道中を繰り広げたのはコレを成功させるための布石。迷うことなく付いて来て、俺が滅茶苦茶に進むことに何の疑問を抱かせないようにしたのだ。

途中までは俺の予定と予想通りの展開。これで、凌統が自分の力で気を引き出せれば完璧だった。

「♪～」

ま、いっか。凌統の鍛錬はまだ2ヶ月目だし。建業に帰るまでには元に戻るだろう。たぶん……

＊

凌統は俺の腕を抱き込み満面の笑みを浮かべている。

「ところで、凌統。当たっているんだけど」

「当ててますよ。一刀さま。それと、私は椿です」

「それは真名じゃ？」

「呼んで下さいますよね？　一刀さま♪」

凌統は俺の甲を爪でつねりつつ女神のような微笑を貼り付けた表情をしていた。

「ああ…つ・椿」

「えへへへ」

七

『七．甘寧に悲劇』

たった2ヶ月。期間だけを見れば我々と過ごした1ヶ月よりも長い時間だ。

2人きりで討伐と鍛錬をこなしてくれれば仲が良くなるという事は分かっていた。だが、納得出来ないことも在る。

例えば、強さ。我々が先に北郷と出会い、彼の元で強くなるために鍛錬してきたものを部下になったばかりの彼女にその場所を取られ、上をいかれたことは私も蓮華さまも許容することは出来ない。

その上、凌統は北郷のことを真名である「一刀」と呼び、彼に寄り添う。まるで自分が妻であるかのように。

それと同時に北郷も凌統のことを真名である「椿」と呼ぶ。彼女が行う行動を受け入れている風である。

私たちには何が足りなかった？　積極性か？　もっと北郷に甘えていればよかったのか？

＊

「はぁー！！」

北郷がいなかったこの2ヶ月は、蓮華さまと模擬戦を行い、汗を流し、兵たちの鍛錬に混ざり過ごした。

私は北郷から学んだ剣に強弱・緩急をつける闘うやり方は、うまいように扱えば孫策さまといい勝負を行えるかもと思わせてくれる力だ。

今、私の相手をしているのは蓮華さまではない。この闘い方を教えてくれた北郷だ。

北郷は私が振るう剣の強弱を見極め、その隙をついて攻撃してくる。手加減をしてくれている模様でこの稽古を中止するようなことにはならないものの、戦場では何回死ぬこととなるだろうか。

「孫権とり…椿が物欲しそうに見ているから、次で終りにしようか？　甘寧」

私だけを見て闘ってくれていたのではないのか？　2ヶ月前までは私が力尽きるまで稽古をつけてくれていたのに…凌統。お前が北郷を我々から奪うのか？　許さない…今の北郷は私の…私だけのものだ！

私の思いに反応してか、身体が鳥の羽のように軽くなった。剣を逆手で持つ利き腕に力が集まっていくのが分かる。

「北郷。私だけを見ろ！」

私が振りぬいた剣は、彼の構えた剣を防御ごと弾き飛ばし、彼に尻餅をつかせた。蓮華さまも、あの女も、そして北郷も目を丸くして私を見ている。私の中で渦巻く思いは歓喜。3ヶ月前に闘った時は

雲泥の差があった力の開き。私は、彼のすぐ傍にまで来たのだ。自分の感覚がどんどん研ぎ澄まされていくのが手に取るように分かる。

「北郷…いや、一刀。私だけを見てくれ！」

ハハハと、乾いた声で笑っている一刀。そうか、私を認めてくれたのだな。あいつよりも私を選んでくれるのだな。

「教えても、見せてもいないはずの北郷の『火』を使いこなすなんて。すごいよ、甘寧。でも、まだまだ」

北郷の顔から笑みが消え、代わりに真剣な表情が浮かぶ。私が彼を本気にさせた。そのことにまで私は興奮するようになっていた。彼が、私だけを見てくれる。蓮華さまや、凌統には見せない顔を私にだけ見せてくれる。私を壊してくれ！　一刀！

＊

甘寧の阿呆！

何に対しての怒りか俺にはわからないが、気は気でも禍々しいものを出して身に纏うんじゃない。

凌統にばかり構っているのではなく、甘寧や孫権にも目を配っておくべきだったと、今更ながら後悔する。

ああなった以上、あれを超える力で叩き潰して正気に戻してやらないと、一生あれに支配されることになる。孫権には1から教えよう。

むしろ甘寧と凌統の2人にも分かりやすいように、ちゃんとしたものを出せるように。

「いくよ、甘寧。これが、北郷の『火』。　侵略すること、火の如く」

俺が横に振りぬく剣と、甘寧の上から振り下ろす剣はぶつかり合って彼女の剣を弾く、身体を引いて体勢を立て直そうとする彼女の胸倉を掴んで地面に叩きつける。背面を強打されたことによって一瞬だけ呼吸が出来なくなった彼女の手から剣を奪い取り、鳩尾に気を纏った拳を入れる。

「かはっ！」

そのうめき声放った彼女は意識を手放して虚空を見上げるようにして、動きが止まった。

「ハァ…なんとかなったな」

俺は孫権たちに終わったことを告げようと倒れたはずの彼女に背を向けた。

次の瞬間には宙に蹴り飛ばされていた。

右腕に決まった気を纏った回し蹴りの一撃。気を失ったまま、気だけで闘う彼女を見て俺は戦慄した。

どうやって、止めよう。

＊

「ここは、私の部屋？」

朝の北郷との鍛錬以降の記憶が無い。

北郷に一撃を入れて尻餅をつかせた…その後から曖昧だ。

寝ながら窓の外を見る。月と星が見えるということはもう夜だということ。半日も寝てしまったのか。

不肖甘寧。まだまだ未熟だな。

しかし、なぜ起きれんのだ？

起きたい。いや、動きたい。なぜ、腕が？　足が？　頭が上がらない？

私が悩んでいると、扉が開き、人が入ってきた。その者は、北郷だった。

「ほ・北郷。私は一体？」

「おはよう、思春。７日ぶりだね」

な！？

「あれからずっと目を覚まさないから心配したよ。一応押さえつけたのが俺だったからなおさらね。孫権は泣きじゃくって君に縋りつ

くし、正気に戻った椿に遠心力が付加された槍の攻撃を食らわされるし」

「私は寝ていたのか？」

「まぁ…ね」

「そうか…」

思えば私は無我夢中だった。北郷、お前に見ていてもらいたくて。私は権利を得たのだろうか？　お前の隣にいる権利を。

「ところで、北郷。私を、真名で呼んだか？」

「嫌…か？」

「構わない。いや、呼んでくれ。代わりに私も北郷のことは一刀と呼ぶから」

これでいい。今はこれで……

ところで、

「なぜ、一刀なんだ？」

「ん。思春が暴れた時に止められるのが俺だけだったからさ。まぁ、その…すまん」

「謝るな。これは私が未熟だから起こった事。一刀が謝るようなことではない」

「許してくれるのか。思春」

何を当たり前のことを。私はそこまで恨みがましい女ではない。ふぅ、凌統には謝らないとな。意識が朦朧としていたとはいえ、酷いことを考え、言ってしまった気がする。凌統は首を傾げるかもしれない、罵るかもしれないが、まずは謝ろう。

「思春。意識の無いお前の着替えをさせたのは俺だぞ」

「はっ？」

「排泄の後片付けと新しい下穿きを履かせたのも俺だ」

「へっ？」

「目を覚まさないから、食事は俺が噛み砕いたものを口移しで食べさせたし」

「…」

「風呂にも入れた」

「…」

「寝るときも一緒だった」

「…」

「8割、いや思春の全ての行為を手伝った。俺は思春の全てを知っ

ている」

「…」

「それでも、許してくれるのか？」

「…」

「思春？」

私の顔を覗き込んできた一刀の顔に頭突きをかました。

「死ね！　北郷！　動けるようになったら確実に殺してやる！　首を洗って待っていろ！」

女心を少しは勉強したらどうだ。…まぁ、少しだけ嬉しかったのは内緒だがな。

八

『八・手負いの当主』

俺は甘寧…思春の部屋で果物を剥いていた。

時折、思春が声を掛けてくるのだが、すぐに会話を打ち切って掛け布団に顔を埋める。熱があるのか別のものなのか、顔を真っ赤にしている。理由は分かっている。俺と2人きりでいることがもどかしい上に恥ずかしいのだろう。

「北郷…」

「なんだい？　思春」

「蓮華さまや、凌統が見舞いに来ないのは、忙しいからなのか？」

思春にとって主君である孫権が見舞いに来ないのはショックなのだろう。あからさまに俯き落ち込み始める。まぁ、あの2人も思春と似たような状態になっているのだ。というか、意識を取り戻してもいない。それだけ強力だったのだ。思春の暴走は…

「北郷さま。孫権さまと凌統さまがお目覚めになりました」

「ああ。ありがとう」

お辞儀をして去っていく侍女を見送り部屋の外に出ようとすると、思春が声を掛けてきた。

「蓮華さまが起きるとはどういうことだ！」
「2人を連れてきたら説明するから、待っていて」
「うむ…」
俺は部屋から出て、2人の元に向かった。

「いたたたた！！」
「いたいいたい！！」
「蓮華さま…凌統。大丈夫か？」
連れて来た2人を見て、思春はあんぐりと口を開けた。
俺はとりあえず3人を思春の寝台の上に座らせる。背筋をシャンと伸ばし、顔は俺の方を見て逸らさない。はぁ、教師冥利に尽きるな。
「ふざけないでください！　首から下が動かせないんです！」
「が・ぎ・ぐ・げ・げ・げ・げ…」
「う…ふぇ…ぐすっ」
上から椿・思春・蓮華の順だ。ん？　なんで、真名で呼んでいるかって？　それは今から全力で説明する。誤解が無いように。ただでさえ天国（パラダイス）を経験しているんだ、納得してもらわないと俺が明日の朝

日を拝めない。

＊

「まず、気とは何かということから始める」

3人の表情があからさまに嫌だといっているが、それを無視しつつ話を始める。

「北郷家が扱う気には2種類ある。内気と外気だ。内気の方は人間が生まれた時から持っているものであり、日々生活するうえで使っているもの。3人とも使っているのは分かっていたし、こちらの方はそれ相応の鍛錬と修行を行えば誰でも習得できる。まぁ、個人差はあるけどね」

座位保持がきつそうなので真ん中に座っている思春以外を側臥位にしてみた。

「あっ楽になりました」

「ごめん、思春」

「れ・れん…蓮華さま」

「じゃ、次」

「鬼畜め！」

「外気とは、自然の中に漂っているもの。さっきも言ったとおり人間は少なからず気を使って生活している。老若男女・善人悪人・武人・商人・農民、関係なくね。内気が自分を動かすのに必要な分だけしか保有していない変わりに、人間は外気を取り込んで力にすることができるというわけだ。これが出来るのは意思を持ち、考えることが出来る人間という種族だけだ」

思春は苦しそうにしているが、他の2人に比べるとまだまだ余裕がある。

「でも気を付けないといけない事がある。外気を力にするということは、他人の気を少なからず自分の中に入れるということ。簡単にいうと精神的に未熟な者が外気を取り込むと、自分の想いとは裏腹に行動してしまうということ。今回は思春の暴走に、2人が感化されて暴れたんだよ。欲望のままに…」

蓮華の顔から先ほどまでへにゃぁとしていた表情が消え、怯え始める。彼女の場合は守るべき民を傷つけたのではないのであろうかってことだろう。椿の場合も然り。

1人座位になっている思春も事の重大さに気付いて顔を顰める。

「民への被害はない。安心しろ」

3人の顔に明るい笑みが戻る。だが、次の俺の言葉を聞いた瞬間に彼女らの時が止まる。

「3人とも俺をそっちのけで、『一刀は私の物だ』って叫んで勝負を始めたんだ。俺、当主になって初めてだよ。女の子に所有宣言されたの」

それを聞いて一番最初に行動したのは椿。真っ赤なリンゴのようになった顔を枕で必死に隠そうとするが腕が動かず悶絶し、孫権は寝返りをうとうと足に力を込めるが動けず、思春は掛け布団を被った。布団の中に隠れた思春を見た2人は思春に身体を起こしてもらい3人で布団の下に隠れた。

確かに頭は隠れた。だが、前掛けがめくれて3人ともしなやかな太ももが惜しみなく晒され、下穿きが丸見えになっている。気を失っているときに何度も見たが、起きているときに見るのとは興奮度がまったく違う。むふふ、眼福…眼福。

＊

「話がずれたが、外気によって暴走状態に陥り、そのまま体力の限界を迎えると気を出すたびにそういった欲望に忠実な状態になるため、俺たちの国では基礎を完璧にした者が上の人間に見守られながら、気を開花させるのが基本。だが、今回思春が暴走したことによって3人とも禁忌の開花を遂げてしまったわけだ。戦闘中に『私は北郷の女よ』って口走ったり、『昨日の夜は激しかったわ』なんて言う事を恥ずかしげも無く口走ったりする可能性が」

「「「イィヤァァァーーーー！！！」」」

「あったのだが、3人とも俺の全力で叩き潰させてもらった。」

俺の言葉を完全に聞き終わった彼女らは目を点にして聞いてくる。

「変なことを口走ったりしない？」
「ああ。しない」
「体現したりは？」
「無いと思う」
「暴走しない？」
「それはこれからの鍛錬による」
ホッとする3人を見て一言。
「ただし、俺は見るだけだ」
「なんで？」
「ふふふ。3人とも覚えていないだろうが、俺でも結構ぎりぎりだったんだ。右腕・上腕骨亀裂、肋骨にも何箇所かひびが入っているし、極め付けが左脚。思春の下段蹴りを喰らった後に、椿の回し蹴りを防御して、蓮華の膝蹴りを喰らったことによる複雑骨折。気を極めていなかったら激痛で立てないところだ」
服を捲り上げ包帯をみせる。神妙な面持ちとなった3人に復讐といわんばかりに忍び寄る。
「とりあえず、お仕置きじゃぁ！！」
両手をワキワキとさせて近寄ると、椿が何をされるのか分かったら

しく動けない身体を引き摺るように逃げようとするが動いていない。
まずは、脇と腹じゃぁ！
「はは…痛っ……はは…ぐふっ…ははは…！？……――――――」
見事な泣き笑い。身体を仰け反らせて逃げようとした椿は固まる。
激痛で動けなくなったのだろう。
さて、蓮華と思春を見ると。
「や・優しくしてね」
「ゆ・緩めに頼む」
俺はにこやかに笑いながら
「ＭＵ☆ＲＩ♪」
３人を笑い地獄に落としてやった。俺をリンチにした恨みは晴らしとかないといけない。俺の精神衛生上な。

九

『九・天皇を守る者』

何かが変だと、心の奥底で思っていた。いや、無意識に感じていたのだろう。目の前にいる娘達は今まで会って来た人間と違うということを。

初めて思ったときは流した。二度目は喜んだ。三度目は嫉妬した。今回はもう驚愕しか浮かばない。

北郷の『火』は、大気中にある外気を身体に取り込み腕に集中させ、爆発的に破壊力を高めるもの。

北郷の『水』は、外気と内気を織り交ぜて身体の動きを円滑にして、攻撃を受け流すもの。

北郷の『林』は、内気を身体能力向上に全て回し、外気を感覚が研ぎ澄まされるようにうまく運用することによって敵の動きを、予想・把握できるようになるもの。

これら3つをそれぞれ1つずつ手にした彼女らを俺は、ただ眺めるだけだった。

＊

体力と気力が元の値まで回復した私たちは一刀が見守る中、鍛錬を

再開した。

気の使い方と外気の取り込み方を覚えた私たちは少しずつ前進していった。椿が率いていた騎馬隊の兵たちも何回か彼の元を訪れて体術や剣の基礎を教わっている模様。だが同性のため容赦が無い。

そんなころだろうか。椿と思春が、彼が唸るほど完全に彼の技を会得したのは。

それを見ていた彼は茫然自失。この言葉以外似合いそうなものが無いというくらい落ち込んでいた。彼が全ての技を極めるのに要した時間は約１２年。対して私たちはまだ５ヶ月しか経っていないからだ。

「そりゃあ、落ち込みますよね」

椿の何気ない一言で始まった会話は、眠れる虎の尾を踏みつけて、ぐりぐりして、磨り潰した。

ええ。私も北郷の技のひとつである『水』を８割がた会得していましたので調子に乗っていたと思います。本気になった一刀は、化け物だった。

「一刀がなれるんだから、私たちも天皇とやらの護衛者に入れるんじゃないかしら」

これを言ったのは私だった。

それを孫呉の兵２０００人が合同訓練している場で言ってしまったのだ。軽はずみだった。

一刀を知っている者も、知らない者も私たち3人に負ける程度だと一刀を認識したのだ。

「蓮華さま…」

「大丈夫よ、思春。いざとなったら3人で止めれば」

「ほう…そんなにもお望みなら本気を出して、潰してやろうか。蓮華」

雰囲気が最初から違いました。私たち3人の後ろにいた兵たちは彼の殺気でどんどんへたり込んでいってしまいます。

『キンッ』

彼が刀を鳴らした瞬間、兵たちは一目散に逃げ出し、練兵場には私たちの姿だけに。

さっきから冷や汗が止まらない。身体が、本能が逃げろと言っている気がする。だが、それと同時に逃げ切れる予感がしなかった。背中を見せた瞬間にばっさりといかれるかもしれない。

私の前に気を纏った2人が武器を構えて立ちふさがった。

「ふっ…侵略すること、火の如く！」

「いきます！　静かなること、林の如く！」

思春は『火』、椿は『林』を用いて彼に肉薄する。

「俺の後ろには天皇陛下が、引いては北郷家が、四家がいる。いくらお前らでも、それを侮辱することは許さない！　『駆け抜けること、風雷の如く』」

彼の姿が消え、彼に向かった2人が宙に投げ出された瞬間に地面に叩きつけられ吐血するさまを見せ付けられた私は、言葉を言おうと息を吸うが、喉を握られ足が空を蹴る。

息を吸うことも、吐くことも出来ず、声もでない。すぐに意識が跳んだ。

＊

「「「ごめんなさい」」」

私たちは誠心誠意を込めて謝っていた。しかし一刀の答えは無言。刀の手入れをしていて、こちらを向いてくれない。

私にとって江東に住む人々が大事であるように、一刀にとっての大切なものは家族であり、仲間であり、守るべき存在である天皇である。それらを守る護衛者という仕事に一刀は誇りを持っていた。それこそ、自分の人生を投げ捨ててでも勤めるものであるかのように。私はそれを軽々しく貶したのだ。

本気を出した一刀に、１０秒も保てることなく負けた私たちは木に吊らされていた。結び方は亀甲縛りというらしい。縄が身体に食い込んで痛い…今も吊るされているのだ。そして熱い。

私たちが吊るされている足元には燃え盛る炎。彼は修行だと言った。
「心頭滅却すれば火もまた涼し」らしいのだが。外気を取り込めば熱くないと言った彼の言葉に飛びついた思春と椿は、燃え尽きて真っ白になっている。

「燃え尽きた…騙された…地獄の業火…気が沸騰してる」

椿はぐねぐねと身体を捻りつつも目は明後日の方向を見ている。そんな椿の足に一刀が触れると、

「はわー♪　冷たくて気持ち…良い…？…寒い！　熱いのに寒い！　凍る！　身体が固まる～！」

外気は奥が深いみたいです。

一刀の目は据わっていた。たぶん今日は何を言っても動じないだろう。諦めるしかないみたいだ。

一刀に触れられた思春は、沸騰したお湯のように湯気を出し、茹蛸のように真っ赤になって行動が停止した。次は、私の番？

「一刀。ごめんなさい…罰は大人しく受けるから、貴方の誇りを傷つけたことは謝るから。私たちを嫌わないで」

一刀が私に触れた後にきた衝撃は、想像を絶する…回転。身体は止まっているのに、頭の中だけが回転するという離れ業。うぷ…ぎもぢわるい。吊らされたまま戻しました。

ちなみに、夕食前に侍女の手によって私たちは救助された。

翌日、彼の部屋に向かうと、彼の姿は無く机にただ一言書かれた竹巻があった。

『旅に出てくる』と。

拾

『拾．孫呉の王のお膝元』

元々一刀の部屋は殺風景であったが、彼の所持品がなくなることによって無人同然の部屋となっていた。そして、机に置かれていた竹巻に書かれていた文字をもう一度読み直す。

「旅に出る…か。処で、どこに？」

「それを書かなかったところみると、単なる書き忘れか、それともなのか、判別が付きませんね」

私の問いに答える思春。

椿は、窓の外を見ながら遠い目をしている。

「椿？」

「あの人、もの凄く方向音痴なんですよね。東と聞いたら右に行くし、南と聞いたら後ろに進むし、親切にもあっちですよって指差してくれた人の前で逆方向に進む人ですから…たぶん、建業の近くでうろうろしているか、とんでもない方向に進んで実は河で流されているかもしれません」

そういえば椿は、一刀と2人きりで旅した…討伐任務に出かけたことがあったけか。報告書には、無事討伐完了し子供達も親元に返したっていうことしか書かれていなかったけど…

椿はぽつりぽつりと、あのとき何があったのかを話し出した。

私と思春は聞く。

聞く…

「白い虎、大熊猫…そして、その言動。何やって！　いや、言っているのよ、シャオ！」

彼女から話された内容の中に、見てみぬ振りができないものが一つだけ混ざっていた。我が妹、孫尚香。「結婚してあげる」発言した、孫呉の末姫の安否が不安になった一瞬だった。

＊

小鳥が囀る森の中で素振りをする男がひとり…

「９９８…９９９…１０００……」

刀を鞘に納め、息をついた男はがっくりと膝をつき四つん這いになって天を仰いだ。

「…死のう」

建業の街から、孫権・甘寧・凌統の３人の元から離れた彼は、今までの自分の行動と言動を振り返った結果、鬱状態となった。

まず、女になったとはいえ英雄に勝ったことで天狗になっていたと

いうこと。

次に、彼女らの潜在能力というか才能に嫉妬したこと。

そして、北郷の技をいとも容易く手に入れた3人に恐怖したこと。

最後に、それを受け止めることが出来なかった己が小さい男だと認めるのが嫌だったこと。

全部を静かな湖畔で悟った彼は、自殺しかけた。偶々通りかかった商人に助けられたが、現在も突発的にこうなってしまう。武人として己の心と対話すると言うのは大事なことだが、彼の場合話にならない。彼が、心の中で飼っている自分は人の話を聞かないモノだからだ。

「兄さん、見えてきたぞ。孫家の姫様が暮らす街だ」

通りかかった商人のおじさんは、一刀をひとりにすると危ないということを商人の勘で悟ったらしく、一刀が呟いた「孫呉の姫」という言葉を頼りに街まで連れて来てくれたのだった。

「私は、商談がありますので去りますけど…ひとりで大丈夫かい？」

「…（頷く）」

「本当に大丈夫かい？」

「…（コクリ）」

商人のおじさんは、心配なようで何度も何度も振り返りながら去っ

て行った。

一刀は、当ても無く彷徨い始めた。なんせ、見たことがない街なのだから……

＊

俺は飲めもしない酒を杯に並々と注ぎこみ、一気にゴクッゴクッと喉を鳴らして杯を空にする。その飲みっぷりを見て周りにいた人間が感嘆の声をあげる。喉が焼けるような感覚に陥ったものの、俺の頭の中はそんなことよりも忘れてしまいたいもので一杯であったが為に、2杯目も一気に飲み干す。

6杯目を飲み終える頃には、ずいぶんと酒が回ってきたみたいで目の前に誰かが座っているのにも気付かなかった。

「ほれ、杯が空じゃぞ。飲め飲め。嫌なことがあったら、酒を飲んで笑い忘れる。得策じゃぞ」

俺の空になった杯に7杯目が注がれる。目の前に座っている女性は、妖艶な笑みを浮かべ俺を見ている。その視線に堪えられなくなったというか、どうでもいいというか、俺は杯を掴みまたも一気に飲み干した。今ので、酒は飲みきったらしく酒瓶が店の店主に運ばれていく。

俺は頬杖をついて、目の前に座っている女性を眺める。

白銀の艶やかな髪、江東特有の小麦色の肌、表情をこそ笑っている

もののその視線は俺を観察するかのようだ。

「次は、儂のお気に入りじゃ。高いから少しだけ飲ませてやろう。旅人よ」

「…（頷く）」

その酒は一言で言うなら…「火」そのものだった。

のた打ち回るようなことはしなかったものの、杯を傾けた状態で固まったのはたぶんこれが初めてだったはず。味を認識したときには、エンドルフィンやらアドレナリンが『ドプッドプッ』と音を立てて放出されていたと思う。

固まった状態で視線だけ動かして女性を見ると、鮮やかに飲み干していた。これが普通なのであろうか。さっきまで、安い酒で酔っていたが、これを口に含んだ瞬間に目が覚めてしまった。意を決して飲み干すが、効き過ぎる。結局むせてしまった。女性はそんな俺を見て『かっかっか』と笑っている。

その後、俺は安い酒を追加して飲み、それに便乗する形で女性も酒を飲み始めた。

「わしはな、ちいさいころからず～と、あやつらを見て来たんじゃ。なのに、冥琳ときたらな。仕事しろ、酒飲むな、しっかりしろと言ってきよる。何様じゃと思っておるんじゃ」

「そーですね」

「策どのだってのう。木に登って酒を飲むし、執務室で見計らって

飲んでおるのに、なんでわしだけがだめなんじゃ！」

「うう～」

いつの間にか目の前に座っている女性の愚痴を聞く羽目になった俺は、机に寄りかかりながら左手に酒を注いだ杯を持って接していた。

「冥琳のあほ～！　昔はよちよちと、わしに教えを請うてきたのに、なんなんじゃあやつは」

「…うえ…ぐぅ」

「聞いておるのか！」

「ええ。聞いておりますよ。黄蓋殿」

女性の後ろに仁王立ちで佇むひとりの女性。しなやかな黒髪に眼鏡が特徴の美女。ただ、幾分か怒っている雰囲気である。背景に鬼が見える時点で…。

「冥琳！？　いつの間に」

女性は俺を盾にするかのように、立ち回っている。

「あなたがいなくなったせいで、今日の政務は終わりそうもありませんなぁ。しかも、昼間から酒ですか。いいご身分なこと」

「（おい。逃げるぞ！　このままでは、おぬしもお仕置きじゃ！）」

このときの俺は思考力がかなり低下していたんだと思う。だって、

今の言葉掛けに何の抵抗も無くしたがってしまっていたのだから。

「っ！？」

俺は妙齢の女性をお姫様抱っこし、大通りを駆け出した。呆気にとられていた黒髪の女性も、気を取り直して兵に指示を出している。ここに、俺＋妙齢の女性　対　黒髪の女性率いる兵団　の戦いの火蓋が斬って落とされた。

＊

邸で酒を飲むなと言われ、儂は街に出てきて食堂に入った。さっさと飲もうと思ったとき、食堂の奥で歓声があがったのを不思議に思い奥に向かった。

そこにいたのは、黒い衣服を纏った男がひとり、安いが度がきつい酒を杯に並々と注ぎ、一気に飲み干すという行為をやっていた。目は虚ろ…酒に酔っているのではなく、何か嫌なこと、ごく最近まで主君の娘が見せていた目だ。

儂は自然とその者の真正面に陣取り、酌をしてやっていた。我ながら、甘いものだ……

で、その後その男と飲み交わし、儂の愚痴を聞いてもらったりとしておったときに、当の本人が登場しおった。絶体絶命。儂は最後の手段と言わんばかりに男に助けを求めた。我ながら無茶苦茶な言い訳だったのだが、完全に酔いが回っている彼にはそれでよかったらしい。逃げ切ったら降ろしてもらって、こやつを逃がそう。そう思

っていた。

この男の実力を見るまでは…

馬よりも速く駆け抜けて、その速度で繰り出される蹴りは鎧を纏った兵たちを軽く吹き飛ばし、冥琳の策で配置された陣形を尽く破壊していく。先程、明命が来た時は、下段から蹴り上げ、彼女を浮かした所で回し蹴りを放ちどこか遠くへ蹴り飛ばした。防御の型を取っていたから問題は無いと思うのだが…

ここで、儂は男を観察する。体は筋肉質、儂を抱えたまま人外の速度で走り、疲れを見せない体力。兵たちがどう動き、どう配置されているのかを見破る洞察力と観察力。なによりも鍛え上げられた兵たちを、ましてや将としてこの地にいる明命を軽くあしらうその能力。ただの旅人として終わらせるのはもったいない。策殿に進言してみるとしようか。断られても、儂の部下に入れてしまえばいい。

「のう…お主、名をなんと言うんじゃ？」

「…北郷」

「そうか…北郷。儂の尻の揉み心地はどうじゃ？　若いもんにはない弾力じゃろう？　胸もさわってみるか？」

「…」

北郷は口を半開きにして固まっている。

「儂の身体を好きにしていいと言っておるんじゃ。返事をせんか」

「…」

しまったのう。止めをさしてしまったようじゃ。

「祭殿！」

は？　目の前に冥琳と明命、それに穏か。しもうた！　北郷は気をやっておる。この速度で飛び込むつもりか！　北郷、止まれーー！！

＊

大通りを駆け抜けてきた北郷と黄蓋の2人組を捕らえるべく動いていた周瑜と陸遜、偶々見回りをしていて巻き込まれた周泰は、もの凄い勢いで走ってきた黄蓋を抱いた男に跳ね飛ばされ、地面に倒れた。2人組みも3人と激突したことによって走る方向がずれ、民家に突撃。その衝撃は凄まじく2人も仰向けで倒れた。

報告を聞いてやってきた現孫呉の王は、現状を見て仲間外れにされたと思い涙を流した。

ここに、2対多の戦いは、引き分け。喧嘩両成敗で決着が付いた。

拾一

『拾一・当主暴走』

頭の中で何かが鳴っている。気持ち悪い…。完璧な宿酔い…か。

確か昨日は、素振りして落ち込んで、馬車に揺られながら走馬灯を見て、食堂で酒に溺れたんだっけ。

何もやっていないなぁ…蓮華たちが見たら呆れるな。いや、失望するかもしれない。それがいいのかもしれないけど。

頭も心も痛いしもう一眠りしよう。きっと、どこかの宿屋だろうし。俺はそう思い、掛け布団を頭まで被り直し横向きになった。掛け布団を上に引いたとき右手が、やけに弾力がある何かに当たるまで、俺はそれの存在に気付かなかった。

「なんじゃ…もう朝かのう」

誰！？　というか、俺。上半身、裸じゃないか！昨日…昨日の晩、何が、何があった？

「…激しかったぞ。北郷。あんなにも乱暴にするとは、お主溜まっておったな」

燃え尽きた。真っ白に…

＊

からかうものじゃないのう。また、思考が停止してしもうた。今日は話を聞かねばならんというに…

それにしても、久しく見ない、いい男じゃのう。これまで独り身できた甲斐があるというものじゃ。どれ、下の方も…

「入ります。祭殿」

「ちっ…冥琳か」

「なぜ、舌打ちをしたのかは聞かないでおきますが。その男ですか？　雪蓮に会わせたいというのは」

冥琳は固まった北郷をじっくりと見て、溜め息をついた。

「祭殿もまた変な者を」

「なんじゃ？　昨日はこやつに煮え汁を飲まされた挙句に、5人仲良く気絶した仲ではないか」

「油断しただけです」

儂は周公謹という人間がどういった者で、どのように考えるかをある程度は知っているつもりだ。周瑜という人間は、相手が誰であろうが油断などしない。あれは異常だったと、忘れるような人間でもない。

「まぁ、いいじゃろう。策殿に会わせられんでも、儂は北郷を引き

込むと決めた。文句は聞かんぞ」

「それは、その男本人に聞きましょう」

「そうじゃな」

さぁ、どんな話を聞かせてくれるのじゃ、北郷よ。

＊

「まずは、名前を聞こう」

昨日会ったような、会わなかったような人が質問を問いかける。俺は無難に答えることにした。

「北郷だ」

蓮華や思春たちに拾われたときと状況が違うのもあって、聞かれるのは普通レベルのものだ。出身、ここにきた目的、身元、どこかの勢力に属しているかどうか。俺は、当たり障りのないように答えた。

「ふむ。まさか、すでに先客がおるとは、残念じゃな」

俺が、ある人に仕えていると言った時の黄蓋の反応はこんなもの。これで、蓮華の客将ですって言ったらどうなるのか。微妙だな…恐らく、何故真名を知っているのか答えろっていう展開になって、攻撃されるのがオチだ。言わないで置くのが得策。

「入るわよ、祭」

新たに部屋に入ってきた人間を見て俺は固唾を飲んだ。

薄紫色の髪を持ち、きめの細かい小麦色の肌。大きな瞳はまるで磨きかかったアクアマリンのように煌めいていて、俺に向ける笑顔はある女性と重なる。俺は思わず呟いてしまった。

「綺麗だ…」と。

きっと蓮華も成長したらこんな感じになるのだろう。

「うん？　ありがと♪」

「雪蓮…私は待っていろと言ったはずだが」

「いいじゃない。祭が認めるほどのいい男なんでしょう。聞いたわよ、昨日コテンパンにされたらしいじゃない」

「…油断しただけだ」

「ふ～ん。油断ね」

俺は2人の会話を聞きながらズキズキと痛む頭を叩いていた。何かを考えようとするたびに頭に靄が掛かったようになって、いらんことまでしゃべってしまう。さっきの「綺麗」なんて、言うつもりは無かった。

目の前にいる女性は確かに魅力的だが、蓮華や思春の方が俺は好きだし、手の平に包み込めない胸は好みじゃない」

「「「……」」」

「大体、年頃の娘なのに露出が高いというか、はしたないというか、見えるか見えないかギリギリのラインのチラリズムというものが分かっていない。普段、隠している所が多い分、あの2人…椿も含めたら3人が脱いだ時は目を外すことは勿体無い。あれは凝視するに限る」

「北郷…」

「なんすか？」

「声、出ておるぞ」

「！？…どこから、ですか？」

「俺は好きだしの辺りからじゃ」

ギャー！　ごめんよ、蓮華・思春・椿。俺、生きて帰れないかも…

＊

「綺麗だ…」

この言葉を聞いたとき、単純に嬉しかった。

面と向かって私個人にそう言ってきた人間は今まで皆無。冥琳だっ

て、偶にしか…言ってくれたことあったっけ。ともかく純粋に嬉しかったのだ。

昨日は、私を除いた5人でイイコトしていたみたいで、私が駆けつけたとき全員まとめて気絶していた。そのときに真っ先に感じたのは、兵を指揮して包囲網を敷いていたあの冥琳が、敗北したと言う事実。戦術が、戦略を上回るなんて冥琳も認めたくないのね。

外で聞き耳を立てていたけど、祭と冥琳という美女が2人いるのにも関わらず、冷静というか無頓着というか手を出さない彼のことだ、一応は信頼できるだろう。2度説明してもらうよりも、私も彼の口からホントの所を聞きたいしね。

だが、予想の右斜め上を行く発言に私は度肝を冷やした。

なんせ、妹と部下の真名が彼の口から出てきたのだから。しかも、裸を見たことがあるらしい。ちょっと、王として、姉として聞いておきたいことが出来ちゃった♪

「ねぇ。蓮華と思春って誰のこと？　詳しく教えてくれない？」

表情はにこやかに、心の中では嬲り殺しに。真名とは神聖なもの。己が認めた者にしか呼ぶことを許さない大切なもの。それをあの堅物である、あの妹が簡単に許すはずが無い。…許すってことは、蓮華が彼に惚れているってことかしら？

「俺が仕えている人と、その部下さ。剣の鍛錬を施している」

「ほう…」

「『施している』ということは、その2人よりも貴方が強いってことよね。表に出て、私にも稽古してくれない？」

こんな優男が、あの2人を超える…か。見せてもらおうじゃない。

冥琳を退け、蓮華や思春を凌ぐその力。

「別に構わないが…頭痛が激しいから、すぐに終わらせてもらってもいいか？」

「ええ。貴方の能力（チカラ）が見たいだけだから」

＊

外に出ると私と彼は対峙する。

観客には冥琳、祭、穏がいる。明命は見張りの任についていていなかった。

私が帯剣していた南海覇王を抜き彼に向けると、彼は刀に手を当てスラリと刀を抜いた。太陽に光を反射し綺麗な、本当に綺麗な刀身を見せる。

「人…斬った事あるの？　そんな綺麗なもので」

「ん？　あるに決まっているじゃないか。4桁以上5桁未満かな…こっちにきてからは、4桁いっていないけど」

こっちって、「荊州」に来てからってこと？

「構えないの？」

「必要ない」

「そう…行くわよ」

「いつでも、どうぞ」

その言葉を聞いた私は駆け、彼に肉薄した所で剣を振り抜く…ことなく自分に剣を引き寄せる。

「…チッ」

彼の舌打ちが聞こえる。あのまま振りぬいていたら南海覇王を弾き飛ばされていた。私は構える。勝負を持ちかけておいて消極的な構えだけど、勝たないと話を優位に進めることができないから、負けるわけにはいかない。

「仕掛けてこないか…。頭がいいのか、それとも最初から勝つことが目的じゃないのか、どちらにしても3人以下だな。3人とも力尽きるまで俺に向かってきたのに、彼女の姉である貴女がここまでのものとは、いささか興醒めだな」

色々と聞き流せないものがあったけど、これは挑発の類。乗っちゃ駄目、乗っちゃ駄目。

「…疾きこと、風の如く」

彼の姿が消えると同時に、後ろから殺気を当てられる。左足を半歩

引き、遠心力を加えながら剣を振るう。甲高い剣と刀がぶつかり合う音が早朝から響き渡る。

私と彼の距離は、目と鼻の先。先手必勝、剣を振り下ろ…さないで距離を置く。

「チッ！」

また、彼が舌打ちをした。どうやら反撃を狙っているらしい。私が攻撃したら、剣を弾くことができるという自信の表れか、それともなのか。

「面倒だな。…逃げを選択した人間がここまで厄介だとは、知らなかった。けど、さすがにこの日の元でこれ以上闘うのは、俺の体力的にきついから終わらせる。『静かなること、林の如く』」

刀を楽に構えた彼がそのまま私に近づいてくる。一歩、二歩…

また、身体が近づいたところで、私は距離を置くために身体を後ろに少しだけ倒した。そこを、狙っていたかのように、剣を握っている右手を掴まれ、彼が懐に入り込んだ。そして放たれる肘鉄は私の鳩尾に決まる。

激痛を通り過ぎ、一気に意識を持っていかれる一撃。私の元に駆け寄ってくる冥琳の姿が見えたところで、私は目を閉じた。

＊

孫呉の女は化け物か！　「風」「水」「林」の3つが見切られ、「火」を軽く防御するなんてありえなさ過ぎる。やばい、また落ち込みそう。

「うぬぅ…相手は女子なのだから、少しは手加減してやればいいものを」

「したよ。思いっきりね。まさか、俺の技を初見で見切るなんて、こんな人間初めてだ」

「ほう。その蓮華・思春とやらより上か？」

「それが誰か、知った上での発言ですよね。黄公覆殿」

「当たり前じゃろう」

「確かに、初見で見切ったのは孫伯符殿が初めてだ。だが、それは初見での話、彼女の実力で俺を地に這わせるのは不可能だ。むしろ、3人にも劣っている状態で俺に勝つと言えるその根性を褒めたい」

「言うのう」

北郷の技を完璧にまで会得したあの3人に、見切っただけの、逃げの孫策が勝てる道理は無い。実力の差があったとしても全力で向かってくる。それが無い奴に剣を教える気にはなれないからな。

「時に、北郷」

「なんですか？」

「儂の胸は、嫌いなのか？」

黄蓋は、自分の胸を両手で揺する。その行為は俺の息子にクリティカルヒットし、俺は前かがみになる。

「なんじゃ、結局の所、好みじゃなくても反応するには反応するんじゃな」

『かっかっか』と笑う黄蓋がむかついたので、俺は後ろに回り、豊満な胸を揉みしだく。

「ほ！？北郷！！　こ、この揉み方は！？　わ、悪かった、儂が悪かった！　揉むな！　本気で揉むな！　あ…ちょ、こらっ…へぅッ」

可愛い悲鳴を出すのだな…ヤバイ。ここに来て禁欲生活が裏目に出たか。拓馬…本物はレベルが違うぜ。お前が持って来た裏ＤＶＤとは比べ物にならないくらい本能を刺激する。

「あ…ああ…あっ――――」

くたりと力を失った黄蓋を支える俺。目を覚ました孫策、たぶん周瑜とたぶん陸遜は、顔を真っ赤にして唖然としている。

ふっ。目の前に揉んでいいおっぱいがあったら、揉まなきゃ漢が廃る！

「揉ませろー！　お前らー！！」

「「「きゃー！！」」」

拾弐

『拾弐・自由な将軍たち』

「は～！　たぁ～！　とぉ～！」

俺の目の前でいくつかの短い棒を鎖で繋ぎとめた武器『九節棍』を操っているのは、緑髪の軍師『陸遜』

武器を扱う上で、それなりの実力はあるみたいなのだが、どうにかならんのかこの間の抜けた掛け声は。

縦横無尽に動く武器を目で追うと9割方、行き先が決まっている。

ぽよん♪

「またかよ！」

「あはははは。穏、良い。もっとやって～」

「くくく。穏は儂らに何か怨みがあるのかのう」

俺は怒鳴り、観客2名はこんな調子、もう1人の軍師『周瑜』は呆れて目を伏せていて、まともにこれをみているのは忍者ルックの『周泰』だけ。

「穏さん！　もっと手を細かく動かしてください！」

「細かく～？　こうですか～？　明命ちゃん」

先程よりも武器のスピードが上がり地面に当たると土が抉られる。それだけ威力が上がったということだが、この軌道…何分か前というか、最初から同じ軌道しか見えてこない。これだと行き先は…

ベシッ！

「ぎゃぅ！！」

今までのものとは比べ物にならない威力の棍の一撃が彼女の身体に決まった。赤く腫れ上がり、その道の人が見たら喜ぶ状態だ。

「痛いです～」

「はぁうぁ…申し訳ございません！」

助言を施したはずの周泰は、涙目になった陸遜のもとに駆け寄り謝っている。

俺はそれを見ながら天を仰ぐ。

孫策から俺に出された贖罪の条件は２つ。

１つは、彼女ら５人の基礎能力強化。つまり、稽古しろってこと。

もう１つは、…

「次は、儂じゃな。ゆくぞ、一刀よ」

真名を呼ばせ、あの場にいた四人を真名で呼ぶこと。

「次って…周泰の番だろ、祭さん」

「嫌じゃ。次は儂じゃ」

「子供みたいな我が侭を言うな。順番というものを守れ」

「最近の男は器が小さいのう」

「ほっとけ」

＊

北郷…今は、一刀って呼ぶことにしている。

結局、明命が祭に順番を譲って祭が彼と稽古しているけど、手も足も出ないってこういうことをいうのね。これを見ていると、母さまと稽古しているときに感じた天と地の差なんか、激しく小さいものだったんだなって思えるわけで。

一刀は、地面に円を描いてその中心に立っている。自然体…足を肩幅に開いた状態で立っているだけの一刀は、祭もそうだけど穏の縦横無尽に動いていたあの九節棍の動きを見切っていて足を上げたり、しゃがんだり、首を傾けるだけで避けていた。

「埒があかん！」

そう言って祭は剣を捨て、弓を構える。だが矢を放つその瞬間、祭の額に彼が投げた鞘が直撃する。

「終了だよ。祭さん」

「ぐぬう」

額に鞘の痕が残る祭は、鞘を返しに一刀に近づく。って、またぁ？

「ほれ、一刀。触っても良いぞ」

祭は胸を張り一刀を誘う。彼は明らかに顔を顰めている。それもそのはずだ。彼がここでこんなことをやっているのは、先日明命を除く私たち4人の胸を揉みまくって陥落させたからだ。大変だった、私たちは彼の手揉みの技術で骨抜きにされて、政務そっちのけで悶絶する結果になったのだから。

「ほれほれ」

彼の目が据わる。馬鹿ね、祭。また……

一刀の手揉みの前に、祭の身体は崩れ落ちた。彼は膝を付き、何かを後悔している。

「さてと…次は、私ね。一刀」

「いや、だから周泰のことを忘れるなって」

「あ…あの構いません。どうぞ、雪蓮さま」

「ありがと♪」

「職権乱用じゃないか」

「細かいことは、気にしな～い。やろ♪　一刀」

私は南海覇王を構えて、全力で彼の元に向かった。

＊

少しは自重してくれよ、俺の腕。

結局孫策の胸まで揉んでしまった。悶えている2人を木陰に運んだ時に周瑜と目が合い顔を背けられた。その瞬間「ああ…またやっちまった」と嘆いた。

この世界に来た当初の沈着冷静な俺は何処へやら。

周瑜は先程まで自業自得の所業で痛がっていた陸遜を連れ執務室に向かった。行動不能になった2人を見て溜め息をついていたからあの王と宿将にも仕事があったのだろう。お詫びに手伝いしに行こうか。

カラコロと車輪の転がる音に気付いた俺は顔を上げる。

「周幼平です。周泰とお呼びください、北郷さま。ご鞭撻の程、よろしくお願いします」

お辞儀をした後背負った長刀の柄に手を掛ける少女。

雰囲気は思春に似ている。さすが期待を裏切らない、見た目通り忍びらしい闘い方をするようだ。手裏剣かクナイか、それとも閃光玉か、果ては煙玉か。久しぶりに心躍る戦いになりそうな予感。

戦いは今まで通り俺は相手の攻撃を受け流すことに集中する。

小柄な身体で自身の身長を越す刀を自由自在に動かす周泰。うまく使いこなしているようだが少しだけ刀に振り回されている感じを受けた。まぁ身体が成長していくうちに気にすることはないものになるだろうし、ここは何も言わないで置くほうがいいだろう。

しかし、ひとつだけ気になることがあった。時折視線が明後日の方向を向き『へにゃ』と擬音がつきそうなほど破顔する少女を見ながら言ってみた。

「周泰…」

「なんでしょうか？」

「俺の左後ろに何があるんだ？」

「お猫さまです」

周泰は宣言通り邸の屋根の上で日向ぼっこをしている猫を見て破顔している。

俺と一対一で戦っている間にも堂々とリラックスする周泰を見て俺は溜め息をひとつ吐いた。

孫家の面々はなんて自由なのであろうか。あ、そうか俺もその一員だっけ。

孫呉の行く末は苦労人・周瑜、貴女に掛かっているかもしれない。

拾参

『拾参・周瑜の手伝い』

朝の調練を終えた後、俺は木陰でぐったりとしている2人に代わって周瑜の手伝いをするために彼女の部屋に向かったのだが。

「はて、何故に厨房？」

とりあえず腹が減っていたので少しばかり拝借し来た道とは違うほうに進むことにした。

「右に曲がって厨房に入ったから、今度は左に行こう」

周瑜の部屋を探して彷徨い歩く。

俺が侍女に連れられて彼女の部屋に着いたのは3刻程経った後だった。

苦笑いして去っていく侍女を見送り、俺は扉を2度叩く。

「誰だ？」

「北郷だ。2人の代わりに手伝いに来た、入ってもいいか？」

「ああ」

周瑜の答えを聞き、扉を開けて部屋に入った。

＊

私の隣で竹巻を整理する北郷。

文字が読めない上に書くことができない。

だが、私が何と書いてあるということを教えるとすぐに覚え、政務やら軍務やらを分けることが出来るようになった。

私は会った当初から疑問に感じていたことを、これを期に聞いてみることにした。

「北郷…お前は何者なのだ？」

「また、その話か」

仕分け作業を行いながらこちらを向くことなく答える彼に、私は疑問を投げ掛ける。

「お前が教えてくれたことだ。兵を使って畑を耕す屯田兵のことや、揚浜式塩田という製塩方法、化石燃料の石炭のこと、あとは肥料など我々が知らなかったこと、考えもつかなかったことを何故知っている。文字を読むことも書くことも出来ないお前が」

彼の手が止まり汗をだらだらと流し始めた。

「人伝で聞いたとか、本を読んで知ったとかは聞かないからな。人

伝ということは、何処かでその方法を実践しているということになるがそんなことはないし、本を読むというのはお前には論外だろう？」

「……あ、周泰に見張りを手伝うように言われていたんだっけ」

「待て」

すくっと立ち上がった北郷の服を掴み、強制的に座らせる。

「明命には、私から言っておいてやろう」

「いや…そこまでする必要はナイデスヨ」

北郷は顔を青くさせている。どうやら、我々に軽い気持ちで教えたあの知識は北郷にとって知っていて当たり前なものであるらしい。つくづく不思議な奴だ。

「冥琳さま～、製塩方法をまとめてきました～、あれ～？」

「ご苦労だったな、穏」

「はい～♪　あ、そうだ。一刀さ～ん、『交番』についてまた教えてくれませんか～？」

「交番？」

北郷の顔を窺うと穏を恨みがましい目で見ていた。ということは…

「穏。北郷から他に何を教えてもらった？」

「ナニモイッテイナイデスヨ」

北郷を無視して穏に視線を向ける

「え～とですね～。……忘れちゃいました～」

ころころと笑う彼女を呆れた目で見ていると、北郷があからさまに安堵の息を吐いた。

「ですから～、一刀さんに教えてもらおうと思ってですね」

「確かに俺の話を理解してくれる2人に話すのは、楽しいし見ていておも…感心してくれるからいくらでも話しても良いと思っている。だが断る！」

「は？」

「ええ～～！？　どうしてですか～？」

「穏と2人きりは断固拒否だ！　まともな文官ないしは周泰を連れてきたら話してやらんでもない」

縋り付いて来た彼女と視線を合わせない北郷。心なしか前傾姿勢になっていることから、あの日のことを思い出したのだろう。やはりあの日2人きりにしたのがまずかったようだ。北郷も耐えることが出来なかったということらしい。

穏は読書家で、優れた書物に異常な興奮を覚えるという奇癖の持ち主。色んなことを知識として語る北郷を歩く本と認識しても仕方の

無いことだ。北郷が語る知識は彼女にとって優れた内容となるのだろう。

「この間は手刀で事なきを得たが、次は無理だ！　抑えられる自信が無い」

「いつも通り揉めばいいではないか」

雪蓮や祭殿のは、毎日と言っていいほど揉み解している彼だ。穏が増えたところで…

「こいつはそれ以上を求めてくる」

私の視線と思惑に気付いた北郷はそう呟いた。呆れた視線を彼女に向けると、「あははは～」と笑って誤魔化された。

「そういえば、雪蓮さまが言っていましたよ、一刀さん」

「何て？」

「今度、閨に招待するって」

「……帰る」

「何処にだ？」

「建業に帰る！　お淑やかな蓮華の元に！　素直な椿の元に！　まっすぐな思春の元に！」

北郷は腰に縋りついた穏を引き摺りながら外に出て行った。しばら

くすると怒声が聞こえてきた、雪蓮と祭殿の声だ。

結局の所、私の疑問は解消されていない。だが、北郷は当分ここから出られることはないだろうし、下手したら蓮華さまたちがこちらに来るほうが早いかもしれない。聞く機会は何度か訪れるはずだ。

「……」

私は自分の胸に手を当てた。

祭殿は北郷に揉まれて以来、胸に張りと弾力が戻ってきたと言っていた。雪蓮は大きくなったと言っていたな。週に一回くらいは私も揉んでもらうことにしよう。この間揉まれた時は、肩こりが解消されたし。

扉を開け外に出ると北郷が上半身裸で邸を逃げ回っていた。

追いかけるだけの４人を見て私は声を張り上げた。

「雪蓮、祭殿、穏、明命。私が指揮を出そう」

「「冥琳、任せた」」

「は～い♪」

「御意です」

北郷は廊下の先で何かを喚いているがそんなことは関係ない。

この間の屈辱戦だ。

「行くぞ！」

「「応！」」

結局、暴走した北郷に胸を揉まれた。

驚くべき北郷の胸揉み技術。美肌効果が出て、もちもちのすべすべ肌になった。

北郷の契約に1人追加された。

まな板のような胸だった彼女に希望の光が照らし始めたようだ。

周りが周りだったので羨ましかったらしい。

拾参（後書き）

一度投稿した内容を破棄して、当分のんびり風景を書かせて頂きます。

拾四

『拾四・冷たいもの』

照りつける太陽。雲ひとつ無い青空。直射日光を受けて上昇する気温。

文明機器に頼る生活をしてきた俺にとって、こういうことは苦手なわけで…

「あつぅ」

寝台の上でパンツ一丁になりゴロゴロと寝転がりへばっていた。

こういう暑い日には、かき氷でも食べたくなる。イチゴ・メロン・レモン・練乳・ブルーハワイ・コーラ…ああ、懐かしい。拓馬と飛鳥の3人で早食いして悶絶したよなぁ。

氷さえあれば何とかなるんだけど。冷凍庫なんてものはないし、ここら辺で一番高い山でも氷は無さそうだし、どうすることも出来ないか。せめて、冷たいものが食べたい。食べ物を冷たく感じるには、水が必要不可欠。霧とかマイナスイオンとか。

ということを考えると…アレくらいか。

俺は服を着て村雨を片手に部屋を出て…部屋に篭る。

動くのは夕暮れで良いやと、部屋の隅で小さくなり眠ることにした。

＊

頭を掻きながら周りを見渡して一言呟く。

「寝すぎた」

窓の外は暗く、月の光が幻想的に降り注ぐ。部屋から出て向かうは裏山。

料理の方の材料自体は厨房の方で分けてもらえれば何とかなるだろうから、雰囲気を出すための演出材料を取りに行くことにしている。

月の光を頼りに裏山を散策。途中、熊と猪と出会い拳で語り合うというハプニングがあったものの、なんとか目的の物を探し出せた。

村雨を無駄に使用して切り倒す。下手な鋸を使うよりも早いし確実である。

「気を取り直して加工♪　加工♪」

出来れば明日にでも作って食べ…食べるには水が必要なはずだ。日本では水道が完全に配備されていて、そんなことは気にしなかったがこちらではそうは言っていられない。俺でさえ一回は湧かしてお茶にして飲んでいるわけだ。

「いきなり挫折か…」

俺は四つん這いになって落ち込む。

カキ氷も駄目。流しそうめんも頓挫。大体おいしい麺を作るのには綺麗な水が必要不可欠。

「拓馬がいれば、こんなことを気にすることは無いのに…」

気には色んな使い方がある。

北郷家は自分の身体に気を纏い戦闘能力を上げる。西嵩家は己の気の質を高め放出することで武器にも気を乗せる事が出来る。圭吾さんの場合は、ちょっと特殊で相手に気を叩き込んで中から破壊する気の使い方をする。南雲家もまた特殊なのだが、ここでは置いておこう。

そして四家で最も気を異例の進化を遂げさせたのが東峯院家である。己の気を何らかの形で具現化させることが出来た。炎・水・風・雷、その他色々。何も無い所から有機物を出すなんて万物の法則を無視した行為だ。

でも、そんなことを言っていると外気を取り込むのは異常だと文句を言われるので面と向かって言ったことはない。

今、考えると気がそういうものに変化してしまうってことは、拓馬のあの動きは…自前？

ちょっとだけ親友が怖くなった。

考え込んでいると空に光の筋が差し込んできた。朝か…。帰らないといけないと思いつつ俺は足を踏み出した。

＊

執務室で竹巻を片付ける私の元にまた彼女達がやってきた。

「冥琳！　一刀がどこにもいないわ」

「冥琳！　本当におぬしでも分からんのか」

「冥琳さま～？　一刀さんは建業に帰っちゃったんですか～」

3人とも別々のことを、だが内容は一緒。2ヶ月ほど前に来た北郷のことだ。

いなくなってはや3日。どうやら夜の内に抜け出したらしく探すのが困難を極め、兵を割いて探しているものの見つかったという報告は聞いていない。

実の所、私も北郷がいなくなったと聞いたとき耳を疑った。短い間だったが人との約束を平気で破るような輩ではないと思っていたからだ。だが、いなくなった者を求めていても仕方が無いこと。

「雪蓮、政務はどうした？」

「え…？」

「祭殿、今日は一個中隊を率いての調練のはずですよね」

「あ…ああ」

「穏」

「あはは～」

「さっさと仕事をしに持ち場に戻れ！」

「冥琳のいじわる～」

捨て言葉を残して去る3人を見送り、私は窓から空を見上げる。

「北郷…お前は今、何処に」

その日の夕方、裏山で遭難した北郷が商人に保護されて戻ってきた。

雪蓮たちから彼に対して、叱咤があったのは言うまでも無い。

拾五

『拾五・カキ氷の為に』

「一刀よ。本気か？」

美しい銀髪を持つ妙齢の女性が弓を構えながら、対峙する男に問いかける。

男は下穿き以外何も身に着けておらず、色んな意味で顔を真っ赤にしている。

「仕方無いだろ…試しに親友の技を真似していたら、どうも変な風に身体が記憶(おぼえて)しまってエライ目に遭うんだ」

ここで言う親友とは、同じ四家がひとつ『東峯院』家の同い年の当主である拓馬のことである。気を具現化する能力(チカラ)を持っている。

その能力を生半可な気持ちで真似した所為でお気に入りの服が焦げてしまった。

「怪我をしても知らんからな！」

目を細めた黄蓋から放たれる矢は、まっすぐ一刀の左肩に吸い込まれ…燃え尽きる。

紅い焔が上がり彼の身体を包んだ。

目の前で起きた光景が信じられず、黄蓋は何度も目を擦る。男は燃えた身体を地面に擦りつけ鎮火している。黒い煙を身体から噴出す彼を眺めていた観客1は言った。

「それって、使い道あるの？」

「親友は、そうだな…。風を纏うことで矢や弾丸の軌道を変えたり、焔を纏って地面を焼いてマグマを作ったりしていたかな」

一番強力だったのは、雷を纏った時だった。拓馬を中心に囲んでいた敵が、あいつが槍を突き立てた瞬間に感電死したこともあったからな。

「ふ～ん」

「ま、俺には合わないってことが分かっただけでもよしとするよ。それに俺の目的は戦いにこれを使うことじゃないからな」

俺はイメージする。冷たくて・透明で・固まっている、アレを――

――――

＊

ここのところ雨が降らず暑い日が続いていた。

昨日帰ってきた北郷は、雪蓮たちの稽古に朝早くから連れ出され干からびていることだろう。

私は筆を置き、二の腕をさする。ふと身体が冷える感覚に襲われたのだ。

「（風邪でも引いたか…心が緩んでいる証拠だな）」

キラリと何かが光った。気になった私は窓の外の光景を見て固まった。私は精神的に固まったのだが、外にいる連中は身体的に固まっている。雪？　いや巨大な氷の中に親友や母親代わり、部下そして北郷が閉じ込められている。

一体何が起こったのだ？

良く見ると窓が凍り付いてきている。

私は急いで部屋から出て兵を招集した。それからすぐに薪を集めさせ氷の周りに敷き詰め燃やすように命令を出す。

純粋な氷ではないようで火に当てるとすぐに溶けていった。

「さ・さ・さ・さむーい！」

「ガチガチガチ」

雪蓮と穏は、震える身体を焚き火に当て身体を温める。北郷と祭殿はあちらの方でなにやら会話している。今回のことは十中八九、原因は北郷だろうな。私は確信している。だが、何をやったのだ？

答えはすぐに訪れた。聞いたことも無いような異様な音。

『ピキキキキキッ――――――』

発生源である北郷の足元から凍っていく様は、なんとも言い難く不可思議な現象。

「一刀…今じゃ止めろ」

「っ！！」

振り向いた北郷の手に握られた白い物体。氷…か？

「頭が痛い…これはやらないほうが良いみたいだ」

「江東に住んで居るからな。このように固まった氷を見るのは初めてじゃ」

「さっき身をもって経験したじゃないか」

「一瞬じゃったぞ。目の前が真っ白に染まった後、冥琳の顔を見るまで意識が無かったからの」

私は2人に近づき拳を握り締め、1発ずつ拳骨を叩き込んだ。その後、思いつく限りの説教を2人に施した。

最後の方には祭殿は泣き、北郷は意識が飛んでいた。

＊

周瑜から気の具現化の禁止令が出された。

だが、冷たいものが食べたいという欲望には勝てずに、簡易式の冷蔵庫の開発に成功。

上段に氷の塊を入れ、下段に冷やしたいものを入れる構造。溶けた水は竹をくり貫いて作った貯水機に溜まるようにしてある。

俺の部屋に設置した冷蔵庫の中には、一度沸騰させたお茶と街で買ってきたお菓子が常備されている。

冷たい水と食べ物があるだけで随分と違う生活が送れる。

まぁ、俺の部屋に来て冷蔵庫に気付いた周瑜が、俺の部屋で仕事をするようになったのは余談だろう。

「北郷。水」

「はい」

杯に細かく砕いた氷を入れお茶を注ぐ。それを手渡すと喉を鳴らして飲み干していく周瑜。

俺はそれを横目で見ながら、上段からあるものを取り出す。

「北郷」

「やらんぞ」

俺が取り出したのは、カキ氷の檸檬水掛け。蜂蜜水もなかなかイケた。

「一口」

「断る」

シャクという歯ごたえと、ほのかな檸檬の味がマッチしていて、ああ懐かしやと涙が…

気付くと容器ごと取られていた。

「ふむ。うまい」

「返せ！」

「嫌だと言ったら」

「……揉むぞ」

「結局そういう流れか」

周瑜は鼻で笑ったがカキ氷に満足し、俺は周瑜のたわわな胸を揉むことによって復讐し、その後2個目のカキ氷を製造した。横で悶絶する周瑜は視界に入れないようにしてだが。

じかし周瑜は、俺の部屋の環境が気に入ったようで入り浸るようになった。そうなると必然的に雪蓮たちも居座るようになるのは言うまでもない。

基本、俺がいないときには来ないようなので、最近はおみやげを持って明命の所に向かうようにしている。

さて、今日は何を持っていこうかな。ねこじゃらし？

拾五（後書き）

四家の連中がとんでもない化け物になってきました。
ありえなさすぎる。
焔を纏うっていうのは、烈●の炎みたいな感じです。

拾六

『拾六・見回り当主』

事の発端は目の前で起きたひったくりの犯人をその場で叩き潰したことだった。

明命の見張り任務におみやげであるおにぎりを包んだ袋を両手で抱えていた俺は、その犯人を見て『風』を使って加速し威力が増した飛び蹴りを背中目掛けて放った。

男は勿論気絶。荷持つも取り戻した。物を取られたお婆さんが俺に礼を言ってきた。俺は気にすることは無い、当然のことだと言い聞かせ明命の所に足を向ける。

すると今度は商人に手を上げている男達を発見。これまた乱入し意見を聞き、商人の言い値に文句を言い破格の値を要求していた男達にお灸を据えた。

ここまで来ると、街の人々は期待するような眼差しで俺を見てくる。

何故か俺が行く先々で何らかのトラブルが発生している。両手で抱えていたおにぎりの袋がうっとおしく感じ、次に見つけた小さな女の子に手を出していた不埒者にぶん投げた。

今日は村雨を置いてきていたので、どこぞの戦闘民族よろしくの肉体的(オハナシ)言語タイムである。

「君は可愛らしい少女から遊んでと言われたら遊ぶだろう？」

「相手が子どもだったら、年長者として遊んでやるのは義務だと思うぞ」

「なら君も僕の同志だ」

少女の手を握った右手を離すことなく俺の肩に左手を乗せてきた男。

「なら一緒におままごとでも……って、んな訳あるかあああぁ！！このロリコンが死に晒せ！！」

何かが砕かれる音、何かが引き裂かれる音、そして何かが握り潰されると同時に男の絶叫が街に木霊する。

「ふっ。悪は滅びた」

俺が格好よく決めゼリフを言うと、観客の男達は男である象徴を押さえて肩を震わせる。子ども達も泣き叫び、その場は地獄絵図と化した。

やってみると中々楽しい見回り。

所為街を歩いているだけなのだが、先程は騒ぎになりすぎて本物の見回りをしていた兵たちが来てしまった。だが、対応が遅すぎる。

今だって恐喝紛いの行為をしていた男達の手を捻り、背後関係を取調べしているのは俺である。

「ほれ、きりきりしゃべらないか」

「何をだ！」

「悪役らしい台詞」

「何だ！それは」

五月蝿いから首を『コキッ』と首を捻って静かにさせる。男の傍にいた小さい男と、太めの男は身体を震わせ俺の前で土下座する。

話される暴虐なまでの税の実態、賊から守ってくれない兵や将たち、日に日に痩せ細って死んでいく子どもや老人たち、泣く泣く忌まわしい賊の扉を開けざるを得ない状況…

「兄さんなら分かってくれるだろ」

「ああ…そうだな」

「なら！」

「この軟弱者共が！」

俺は小さな男の身体を地面にうつ伏せに寝かせ仙骨部分に座り、首を両手でがっしりと固定し仰け反らせる。まぁ、要するに海老反り体勢にする。男の背中から木を斧で倒した時になるような人体からは出そうに無い音が響く。

「如何なる理由があれ、賊に手を染めると言う行為はやってはならないことだ！」

「ぐげー」

「望むな！　ねだるな！　与えられるのを待つな！」

「ぐがっ」

「自ら動く！　それでこそ国は成り立つのだ！」

「……」

「俺の話（ウタ）を聞けええええぇぇぇーーー」

母と櫻さまに俺も毒されていた模様。ネタに走るとは俺も落ちたものだな。

汗を拭いながら俺はそう思った。視界の端で街人に介抱されている男達は見ない。見ないってば…

＊

兵士に拘束され、王の説教、宿将の慰め、腹をすかせた猫娘が貧血で倒れたそうで、おっぱ…緑髪の軍師は俺が出した被害状況を纏めているそうだ。そして俺の前にいるのは。

「何か言いたいことはあるか？　北郷」

青筋を浮かべ般若となった周瑜を前に挫けそうな俺。頑張れ俺！

負けるな俺！

「お前が一概に悪かったとまでは私は言わないが、民からお前に言伝がある」

「え？」

「『やり過ぎ、自重しろ』だそうだ」

「誰の声？」

「さあな」

俺に課せられたペナルティは、邸の周りに生えた雑草の処理。社会奉仕（ボランティア）ってこの時代からあったのだなぁと感心した。次の日が土砂降りで躊躇っていた俺に笑顔で『頑張って♪』と言った孫策に復讐することを誓って、その日は1日草刈を勤しんだ。

拾七

『拾七・管輅の占い』

俺が街に出て肉まんを頬張っている時だった。

「しっかりと味付けされた餡、肉汁を逃さないように厚くそれでいて柔らかさを失っていない皮、最高〜♪」

左手の表面だけ氷を纏い、容器を冷やして中に入っているお茶を間接的に冷やして飲む。

最近小細工ばかり巧くなっていっている気がする。

「兄さんや」

「はいはい」

俺に話しかけてきたのは1人の老婆。杖をついて小柄な身体が猫背になることにより一段と小さくなった状態で座っている俺を見上げている。

「黒き武人とは、お主のことじゃろう？」

「いや。聞いたことはないが」

「そうか…人違いか。いや、管輅が新たに占ったのだ。『黒天を切り裂き、天より御遣いとなりし者が現れ、乱世を照らす光となる』

これが、今回の予言だそうだ」

「胡散臭い上に、なんで俺に言う？」

「お主も“外”の人間じゃろう？」

そのことを知っているのは俺と跳ばしたあいつらと、説明した3人娘のみだ。

手元にあった村雨を素早く抜刀し老婆に斬りかかる。

「ははは。いきなり本性を出したようじゃのう。ほうれ付いて来い」

老婆は若返っていき、年端もいかぬ少女となり…ちっこい幼女の姿となり宙に浮かぶ。

「妾の名は姐己。絶世の3大美女じゃ！　敬え」

「寝言は寝て言え。幼女」

「何を言うか。この頃の女子は皆、可愛いというのじゃぞ。肌はぷにぷに、容姿は端麗「実際年齢は？」…女子に年齢を聞くのはデリカシーの無い奴じゃ」

「殷の王妃が何を言うか。少なくとも1千はいっているだろうが！」

「可愛くない男じゃ…よし、ひとつ地獄を見せてやろう」

「街の人に手を出した瞬間、手前の手足は宙を舞うぞ」

俺は姿勢を落とし『雷』の構えを取る。これならば、相手が動いた瞬間に斬りかかる事が出来る。

「チチンプイプイ、チチンプイ。『北郷一刀』よ、女にな～れ～」

効果音がなるような魔法少女のノリで回転する姐己。

寒い一時が過ぎ去る。俺は身体を調べるが何も変わった所は無い。

失敗？　それとも嘘？　俺が幼女を見ると、なにやら本を持ち出して読んでいる。

どうやら呪文自体は間違っていないようだ。

「人騒がせな…おい！　幼女、今なら土下座で許してやるぞ」

「幼い童に外道なことを」

「この国の王様は妖術使いの者は容赦無く殺す方だ。土下座するのと連れて行かれるのはどちらがいい？」

「すみませんでした」

「よし」

事情を聞いてみると、どうやら俺を飛ばした白い服の道士のことを知っていて、あいつが連れて行きたかった北郷一刀と俺は別人ということも聞いた。

話に聞いた北郷一刀という人物は民主主義国家の学生で、人を殺し

たことが無いお人好しなのだそうだ。俺とは似ても似つかない人物。存在の起源だけ同じで、環境そのものが違うようだ。

「うぬぅ。妾の術は完璧なはずなのじゃ。何故、効かんのじゃ？」

俺じゃない『北郷一刀』に掛かっていたりして…

姐己は首を傾げながら消えていった。しかし、あいつらは何でもありなんだな。

俺が幼女と戦っている？間、時が止まっていたようでいきなり消えた俺に戸惑った店の店主が慌てている。

「あっ！　食い逃げじゃないですよ～！　まだ、喰い終わっていないし！」

＊

姐己との会話で得た情報を元に考えると、あいつは本来の北郷一刀を連れてくる可能性がある。

何が目的なのか。どうして俺たちなのか分からないが、何時までもお前らの好きなようになると思ったら大間違いだ。北郷家の当主の力をあまり甘く見るなよ。

いき込んで帰って来た俺を待っていたのは

「はじめまして。北郷　刀花（トウカ）です。雪蓮さんたちの下でお世話にな

りますので、よろしくお願いします」

丁寧にお辞儀した元『北郷一刀』に俺は顔を引き攣らせた。

拾七（後書き）

ＴＳ物のオリキャラ追加。

拾八

『拾八・天の御遣い』

雪蓮たちの話によると昨晩拾って帰ってきたらしい。

俺のところに報告が来ていなかったのは単に漏れた訳でなく、どういう人物で孫呉に有益になるかを見極めた後、正式に紹介するというものだった。

大体説明するのと尋問する場所に俺の部屋を使っている時点で狙いが分かる。

「俺の秘蔵の羊羹とわらび餅をどうした？」

「勿論、使わせて貰ったわ。刀花ったら大喜びだったわよ。『日本のお菓子をここで食べられるなんて』ってね。冷蔵庫も見て驚いていたし」

言葉とは裏腹に雪蓮の目は笑っていなかった。

「…聞かれていないからな」

「何をかしら？」

恐らく彼女との会合で俺に疑問を持ったか。いや、確信しているだろうな、俺が未来から来た人間だと。

それを面と向かって聞いてこないのは、俺から話すのを待っているからなのか。

「あの～」

おずおずと俺に話しかけてきた少女。俺と同じ苗字、容姿は幼くなり身長は蓮華並み、黒に近い茶髪の髪を肩まで伸ばし、爛々と輝くその瞳はまるで俺がどういう人間か見通しているようだった。

「あの私、北郷　刀花です。聖フランチェスカ学園2年の学生でした。なんでこんなことになったのか、全然分からないんですが、皆さんのお役に立てるように頑張ります。得意なものは料理…かなぁ？　掃除も…出来るよね？　苦手なものは、台所に出る黒いアレです。飛ぶ姿を一度だけ見たことがあって、トラウマです」

台所の黒い悪魔。ゴッキーね。分かります。

しかし、得意なものと言うからには自信を持って言えよ。

「北郷」

「なんだ？」「はい」

周瑜の掛け声に同時に反応する俺と彼女。俺は普通に、彼女は俺と同じ名前だとは知らなかったため唖然とした表情を作る。

「男の方だ」

「俺に何をしろと？」

「彼女には天の御遣いとなってもらう。だがそれを表に出すのは、江東を取り戻してからだ。それから、天の血を孫呉に入れたいとも考えている。これは雪蓮の発案だ」

周瑜が目配せした方にいた雪蓮がその後を引き継ぐかのように話し出した。

「一刀も分かるでしょ。現在の孫呉に有力な力を持つ男の武将は一刀、貴方くらいしかいない。だから、刀花を娶らせようと思ったんだけど……一刀、話してくれるわよね」

「一応、聞くけど拒否権はあるのか？」

「あると思っているのかのう？」

今まで黙っていた祭さんが鋭い睨みを利かせて俺に答えた。

「穏と明命を呼んでくれ。話すよ。俺が誰で何なのかを全て」

「すまんな」

「いや…蓮華と思春と椿の3人には聞かれたから答えたものだしな」

「普通、教えてくれるんじゃないの？　そういう場合は」

「さっきも言ったとおり、聞かれなかったからな」

俺の答えに雪蓮と祭さんが溜め息をつき、周瑜は呆れた表情を見せた。

＊

俺の部屋に集まった武将3人と軍師2人＋1人。

俺以外全員が女という拓馬なら泣いて喜ぶシチュエーション。ただ視線は真剣そのもの。

「俺の名前は北郷　一刀。出身は『日本皇国』という。恐らく刀花とは違う国だ」

「確かに刀花は日本と言ったわ」

「たぶん歴史が少しだけ違う世界だろう。その証拠として俺と刀花は、最初から君らの名前を知っていた」

「刀花が儂の黄蓋という名を聞いた瞬間に、黄公覆という名前が出てきたのは知っておったからか」

「刀花の世界はどうか知らないが、雪蓮や周瑜たちの生きたという証は三国志と名を変え有名になっている。だから、俺と刀花はこれから何が起こるか、ある程度は思いつく」

「あの…」

控えめに手を上げた刀花に全員の視線が向けられる。萎縮したようにもじもじとか細い声で俺に問いかけてきた。

「知っているんですか？何が起こるか」

「俺は孫氏や呉氏を読むときに、原作知識も少しはあった方がいいかなと、小説や漫画を読んだくらいだが…まさか、知らない？」

「歴史…嫌い…」

俺は固まった。そっぽを向いた刀花は小さな声で歴史批判を繰り返す。

周りの彼女達もどうすればいいのか分からなくなったようで、俺を見たり刀花を見たりして落ちつかない。

「え～と。俺と刀花で決定的に違うのは育った環境だろう。俺の国は天皇主体の皇族主義国家。今の大陸みたいな世界だ。そして彼女の世界は民主主義国家。国民主体の国のはず…。争いの無いまでは言わないが、少なくとも刀花は人が死ぬ瞬間を身近に感じたことはないはず」

姐己の話によればそういった国のはずだ。

「なんで私の国のことを、皇族主義国家出身の…えと、一刀さんが知っているんですか？」

「企業秘密だ」

「え～？　聞いたら話してくれるんじゃないの？」

雪蓮が頬を膨らませて抗議してきた。

「それは置いておいて、俺はその天皇を守護する四家のひとつであ

る『北郷家』の当主なんだ。雪蓮や祭さんを圧倒する力は、天皇をあらゆる外敵から守るために必要なものというわけだ」

この説明で納得してもらわないと、機密事項はさすがにしゃべれないからな。

「まだ、しゃべっていないことがありそうだな」

「あるけど、これで勘弁してくれ」

周瑜が目配せすると抗議したそうなのが2人いたが、一応は納得してくれるようだ。

「刀花は天の御遣いとして、扱うことは決まっている。北郷、お前はどうする？」

「今まで通り、客将で通してもらえれば助かる。俺は誰かの上に立てるような出来た人間じゃないからな。やはり本職である守るという行為に専念したい」

「あの…」

「またか、刀花？」

「えっとですね。一刀さんは雪蓮さんや祭さんは真名で呼ぶのに冥琳さんは、どうして真名で呼ばないんですか？」

「それは俺が周瑜に認められていないからだろ。俺のことを一刀って呼ぶまでは…」

「そうだったのか」

「あれ？」

「なんじゃ、相互ともに誤解が生じておったようじゃな」

しかし、これが元『北郷一刀』なのか。俺とは絶対に違う性格だし、疑問に思った物事をずばずばと言ってのけるその根性、尊敬に値する。

「……って、娶る？　刀花を俺が？　ちょっと待て、俺の本命は蓮華だと何回言えば分かるんだ」

「ん？　蓮華も娶ればいいじゃない」

「一夫一妻が普通だろうが！……いや、ここは違うか」

「訳を話せば蓮華も納得してくれると思うわよ」

なんとかしなければ本当に結婚することになってしまう。起源が同じ人間ということは、遺伝子レベルでなんらかの障害があるに違いない。

「刀花は？　初恋とか恋愛とかそういうのを飛ばして結婚なんて考えられないよな？」

「え…えーと。不束者ですがよろしくお願いします？」

「いえいえこちらこそ……って、拒否しろよおおおぉぉぉ！！」

俺の叫びはどこまで響いたものか。

拾八（後書き）

天の御遣い（準ヒロ）　＝刀花
黒の武人（主）　＝一刀
恋姫（正ヒロ）　＝孫権
ライバル登場、そして彼女の出番はいつになることやら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2814h/

恋姫と、北郷家当主

2010年10月9日07時23分発行